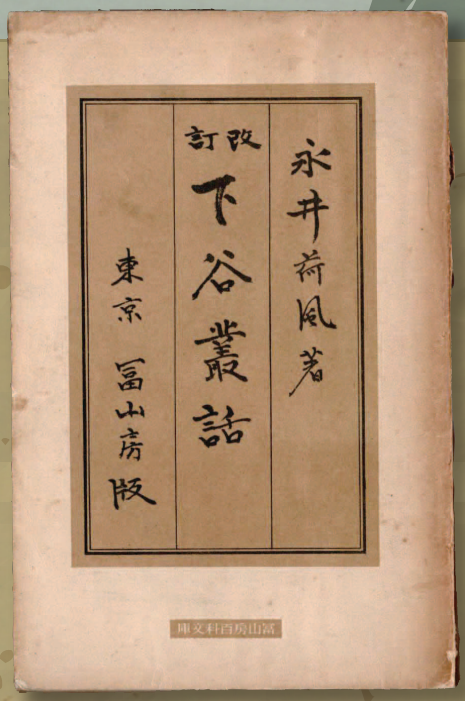
大沼枕山・鶴林と永井荷風『下谷叢話』



二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「近代日本の「知」の形成と漢学」

企画展

大沼枕山・鶴林と永井荷風『下谷叢話』

展示期間　二〇一九年九月二六日～一一月一六日

場　所　二松学舎大学九段一号館地下三階　大学資料展示室

はじめに

大沼枕山（文化十五年〈一八一八〉～明治二四年〈一八九一〉）は幕末・明治初期の江戸において活躍した漢詩人である。枕山は、幕府の役人でもあり、漢詩人でもあった大沼竹渓（宝暦十二年〈一七六二〉～文政十年〈一八二七〉）のもとに生まれた。竹渓とは早くに死別するが、菊池五山ら、化政期の江戸の大家のもとで頭角を現し、二十一歳のときに処女詩集『房山集』を刊行して以降、幕末維新期を代表する漢詩人として活躍した。『枕山詩鈔』をはじめ、多くの詩集を出版するとともに、下谷三枚橋に居を構え、詩社下谷吟社を経営した。関東一円に多くの弟子を得、その名声は、維新後も衰えることはなかった。

この枕山ほど、近代の文学者から愛された漢詩人も珍しい。具体的に述べるならば、まず、大正・昭和期に、小説家の永井荷風（明治十二年〈一八七九〉～昭和二四年〈一九五九〉）が、枕山に強い共感を示し、『下谷叢話』[1]において、その生涯を取り上げ、幕末の喧噪のなかで文雅に遊ぶ漢詩人、あるいは維新期の変転の中で伝統を守る詩人として、印象的に描き出した。今日でも、この『下谷叢話』に描かれた風雅の人としての枕山の姿に憧れ、江戸漢詩の研究を志す者は多い。

また、戦中には、漢学者の木下彪（号・周南、明治三五年〈一九〇二〉～平成十一年〈一九九九〉）[2]が、『明治詩話』において、枕山の「東京詞」（明治二年〈一八六九〉刊）を高く評価した。「東京詞」は、七絶三十首の連作詩であり、詩に挿画が配され、画帖仕立てで出版されている。詩は、開化期の東京の様子を巧みに描き出しており、その中には、明治新政府の高位の人物を諷刺するものもある。木下の著述により、枕山には、反骨の人というイメージが加わった。

このように、作家や研究者によって、様々な意味づけが行われるなか、枕山の子孫たちは、枕山が遺した典籍や書簡、書幅を保存し、その生涯と文学について継承・顕彰を行ってきた。まず、枕山の娘の嘉年（号・芳樹、万延二年〈一八六一〉～昭和九年〈一九三四〉）は、自ら詩作するとともに、『枕山先生遺稿』明治二六年〈一八九三〉などのいくつかの枕山の詩集を校訂・編纂した。嘉年と結婚し、大沼家の養子となった鶴林（文久三年〈一八六三〉～大正二年〈一九一三〉）は、枕山の遺志を継ぎ、中学や自らの塾において漢詩文を教えるとともに、雑誌『新声』『新潮』などの漢詩欄の評者として活躍した。

鶴林と嘉年の間には、娘のひさ（明治二十年〈一八八七〉～昭和五二年〈一九七七〉）が生まれた。このひさは、楠荘三郎（号・正済、明治十七年〈一八八四〉～昭和十八年〈一九四三〉）という、後に鉄道局に勤務することとなる人物と結婚した。荘三郎は、その生涯の大半を役人として過ごし、詩文を作るなどのことはしなかった。しかし、荘三郎は、子孫として枕山の顕彰に強い意欲を燃やし、晩年にいたるまで、その資料の整理と保存に力を傾けた。荷風が『下谷叢話』を著す際に、嘉年へのインタビューや資料の貸借などのための、大沼家側の窓口となったのが、この荘三郎である。彼は息子正名（明治三九年〈一九〇六〉～大正十二年〈一九二三〉）を大沼の家に復し、自身の子孫が大沼家を継承することを企図した。

鶴林と嘉年、荘三郎とひさ、そしてその後の大沼家の人々が伝えてきた枕山の記憶と資料は、枕山の玄孫である大沼千早氏によって受け継がれた。千早氏は、一族についての資料を整理しつつ、精力的に枕山を研究した。その成果の一端は、福生市郷土資料室編『大沼枕山来簡集』（福生市教育委員会、一九八八年）や、『漢詩人たちの手紙―大沼枕山と嵩古香』（ゆまに書房、一九九四年）、また、雑誌『游星』に連載された論考[3]などのかたちで世に公になり、多くの研究者に示唆を与えている。

千早氏が守られた資料は、書翰を中心とする資料二六六点が、二〇一七年に国立国会図書館に寄贈された。その後、枕山・鶴林・楠荘三郎の三代にわたる書幅、書籍、稿本、詩稿などを中心とする二〇〇点近い資料が二松学舎大学に寄託された。これは、枕山の伝記のみならず、近世・近代の日本漢文学に有益な情報をもたらす、貴重な資料である。その詳細な内容などは、後日公開される予定である。本展示においては、この貴重な資料群の中から、とくに研究の上で大きな意義を持つものについて紹介する。

すでに述べたように、荷風の『下谷叢話』は、枕山の評価に大きな影響を与えている。ただ、荷風は、自らの史伝を劇的なものにしたいという意識が働いたためであろうか、『下谷叢話』の結末において、以上に見た鶴林の系統ではなく、もう一人の養子であった湖雲（名・新吉、元治元年〈一八六四〉～大正四年〈一九一五〉）について、その記述の過半を割き、かつ、湖雲の子孫の零落の様子をことさらに強調した。このたび寄託された資料により、枕山の一族の近代における力強い歩みが明らかとなり、漢文学研究に新たな視座がもたらされることを願ってやまない。

1　荷風の、大沼枕山や鷲津毅堂に関する史伝には、複雑な改作過程があり、大正十三年（一九二四）に『女性』に「下谷のはなし」が連載され、それを増補修正して春陽堂版『下谷叢話』（大正十五年〈一九二六〉）が刊行され、その後、さらに変更を加え、冨山房版『改訂下谷叢話』（昭和十四年〈一九三九〉）が刊行された。本文章においては、『下谷叢話』と言う場合、『改訂下谷叢話』を念頭に置いている。

2　木下彪の事跡については、『木下彪　国分青厓と明治大正昭和の漢詩界』（近代日本漢学資料叢書4』（二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業・近代日本の「知」の形成と漢学、二〇一九年）の町泉寿郎氏解題を参照。

3　大沼千早「枕山先生のこと〈続〉のぼり旗」（『游星』10巻1号、一九九六年四月）、「枕山先生のこと〈続〉東京詞」（『游星』10巻2号、一九九六年十月）、「枕山先生のこと〈続〉江戸名勝詩」（『游星』17巻1号、二〇〇三年六月）、「枕山先生のこと〈続〉旧派の俳人」（『游星』17巻2号、二〇〇三年十二月）など。

■大沼枕山・鶴林と永井荷風『下谷叢話』

はじめに
目次
大沼家・鷲津家系図

Ⅰ　大沼枕山 ―その詩と書― ……6

1　大沼枕山肖像
2　大沼竹渓書幅（「老去宦情…」）
3　大沼枕山対聯（「已抛壮志…」）
4　大沼枕山書幅「涼夜有懐」
5　大沼枕山扁額「存古趣」
6　大沼枕山扁額「閒邊富貴」
7　大沼枕山書幅（「斉山纔了…」）
8　大沼枕山書幅（「七家才力…」）
9　大沼枕山著『房山集』
10　大沼枕山著『枕山詠物詩』
11　大沼枕山著『枕山詩鈔初編』
12　石川省斎編『皇朝分類名家絶句』
13　大沼枕山著『江戸名勝詩』

Ⅱ　鶴林・嘉年と明治の社会……15

14　大沼善次郎（鶴林）履歴書
15　九月六日沢田善次郎（大沼鶴林）宛
長梅外書簡
16　長梅外輯解『在邇録』
17　『進徳雑誌』第1集
18　小松版四書集註
（『大学章句』、『中庸章句』、『孟子』巻3・4）
19　大沼鶴林輯著『枕山先生遺書　詩学明辨』
20　『詩海問津』
21　「枕山詩話」稿本
22　「熙熙堂詩話」稿本
23　大沼鶴林著『漢学知要（初版）』
24　大沼鶴林著『漢学知要（第三版）』
25　大沼鶴林点注『点註四書　論語読本』
26　大沼鶴林編『漢文異采』『続漢文異采』
27　順天中学校友会『校友会雑誌』第壱号
28　順天中学祝辞原稿
29　大沼義塾趣意書
30　「大沼義塾開設ノ趣旨」
31　「牛込漢文学会開設之趣意」
32　「牛込漢文学会趣意」
33　「帝国青年会会則」
34　帝国軍人遺族授産所趣意書
35　麻布獣医畜産学校宛大沼嘉年挨拶状
36　裏組目録（箏曲免状、大沼嘉年宛）
37　水上珍亮編『日本閨媛吟藻』
38　大沼枕山著『枕山先生遺稿』
39　大沼嘉年詩文稿
40　石川文荘詩稿「輓大沼芳樹女史」

Ⅲ　楠荘三郎と枕山をめぐる考証……28

41　楠荘三郎書入れ「下谷のはなし」抜刷合綴
42　楠荘三郎編　大沼家伝来書籍目録
43　楠荘三郎編『上梓逸詩稿』
44　柳瀬道雄編『大沼家詩存』

解説　枕山の志を継ぐ者たち―大沼鶴林・嘉年と楠荘三郎

凡例

一、本図録は、大沼千早氏より二松学舎大学に新たにご寄託いただいた大沼枕山・鶴林関係資料を紹介するものである。資料のご寄託を許された大沼千早氏にあらためて感謝申し上げますとともに、ご援助くださいました大沼信之氏、中村左右子氏に深謝いたします。

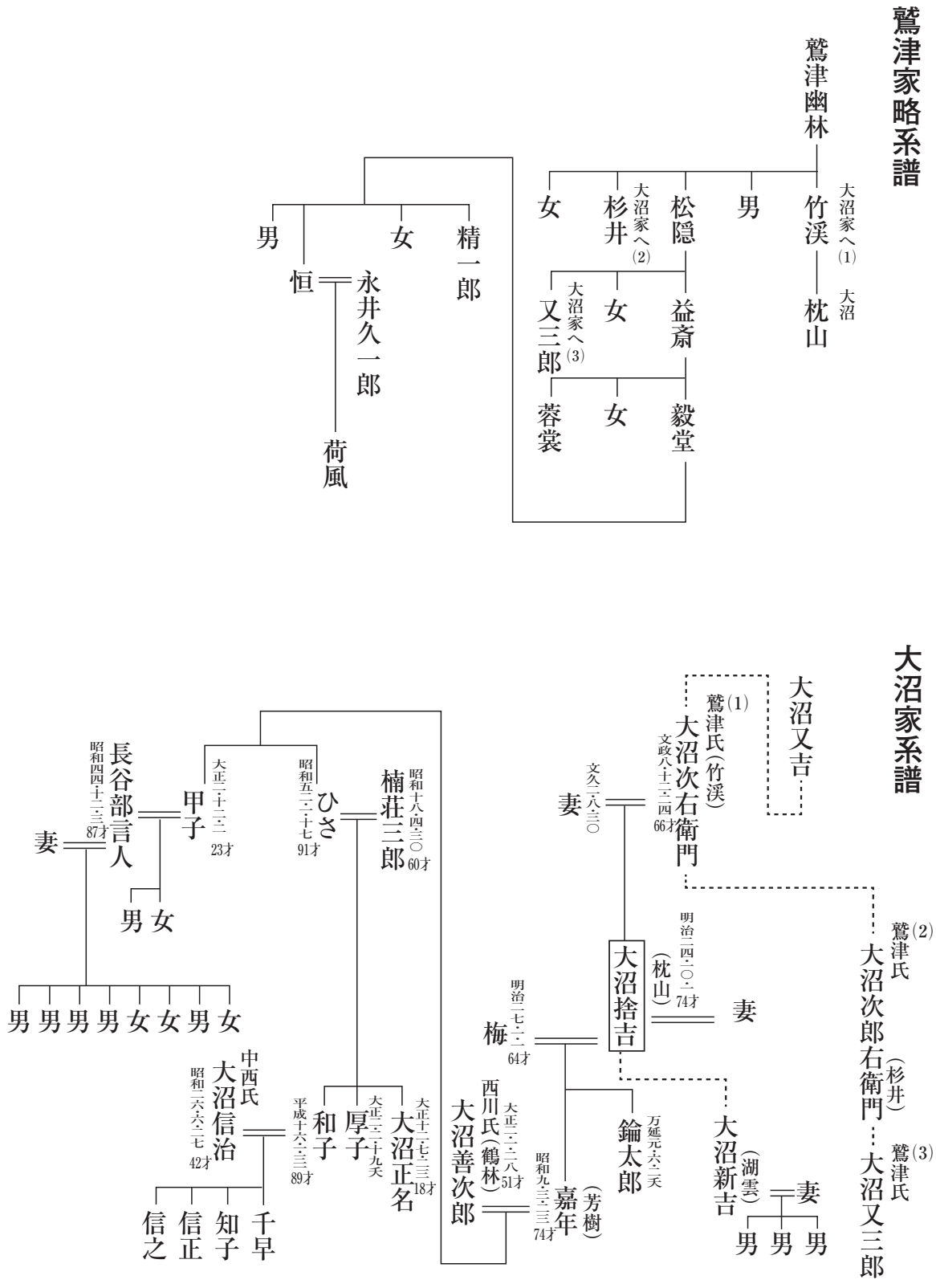
二、資料名については、題が付されているものについては、鍵括弧または二重鍵括弧で表記した。また、著者・編者などに関する著・編・注などの表記は、原則として、資料の記載に従った。

三、引用にあたっては、原資料の表記を尊重しつつ、句読点及び濁点を適宜加えた。また、訓読などについては、読みやすさを考え、すべて通行の字体を用いた。ただし、通行の字体を用いた場合、著しい意味の混乱をもたらす場合については（余と餘など）、正字を用いた。

四、解題は、合山林太郎が執筆した。なお、字句の解読にあたり、町泉寿郎氏よりご教示を賜った。

五、本図録は、二松学舎大学の大学資料展示室の企画展「大沼枕山・鶴林と永井荷風『下谷叢話』」（二〇一九年九月二六日～一一月一六日）の展示図録を兼ねるものである。

大沼家・鷲津家系図

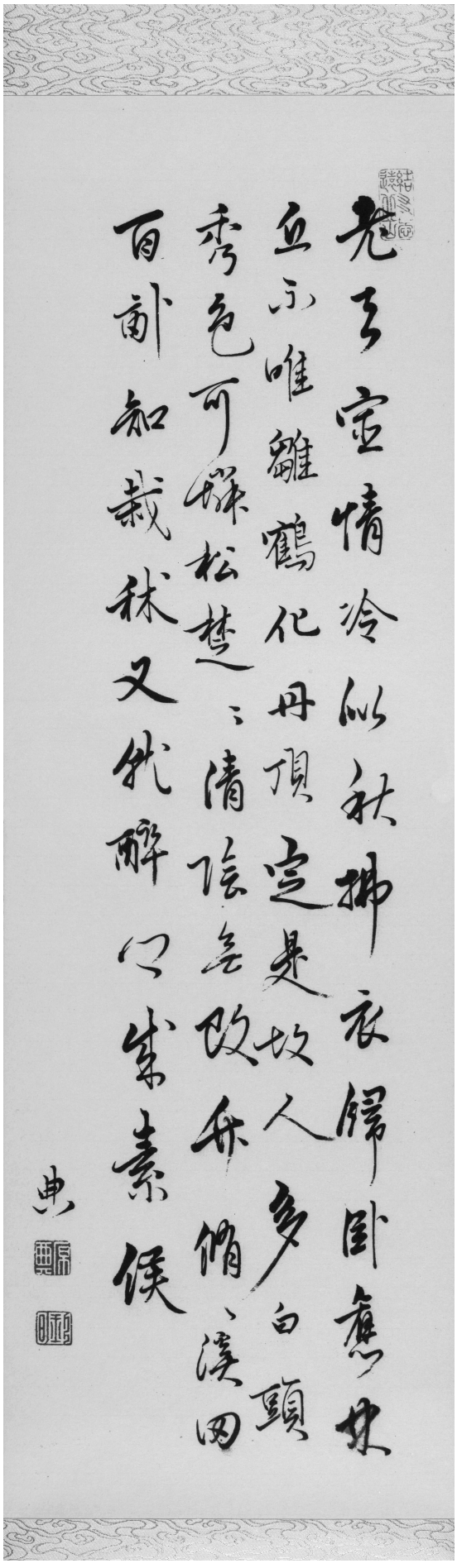


系図は大沼千早氏が作成されたものを転載した（福生市郷土資料室編『大沼枕山来簡集』、福生市教育委員会、1988年、62頁）。

Ⅰ　大沼枕山 ―その詩と書―

1　大沼枕山肖像

枕山の子孫である大沼千早氏のもとに伝わった枕山の肖像。枕山の肖像画は原画を臨模したものも含め、数点伝わっている。たとえば、東京大学史料編纂所には、嵩海蔵氏旧蔵のものが収蔵されており、それには、画像の上に「良工心苦」で始まる七絶が掲げられている。この肖像は、荷風の『改訂 下谷叢話』（冨山房、昭和一四年刊）の巻頭に掲げられた。千早氏は、本図について、三浦雪堂が模写したものと述べている（「大沼枕山叢話」枕山の肖像画　http://onumachinzan.cocolog-nifty.com/blog/2012/10/post-1818.html、二〇一九年八月一日最終確認）。なお、枕山の肖像については、枕山に「琴抱道人、倩鶩湖寫余真以乞題詩、賦此、書其上頭（琴抱道人、鶩湖に倩ひて余の真を写せしめ、以て詩に題せんことを乞ふ。此に賦して、其の上頭に書す）」（『枕山詩鈔三編』巻下）という詩があることから、鈴木鶩湖（文化一三年〈一八一六〉～明治三年〈一八七〇〉）によって描かれていること、明治一三年に中島杉陰により模写が行われていること（『漢詩人たちの手紙―大沼枕山と嵩古香』所収、明治一三年三月一五日 嵩古香宛枕山書簡による）などが同氏により指摘されている。



2 大沼竹渓書幅（「老去宦情…」）

枕山の父大沼竹渓が揮毫した書幅。詩題が記されていないが、退隠の心持ちを述べた詩である。鷲津幽林の長男であったが、幕府の御広敷添番衆大沼又吉の養子となり、その職を継いだ。役人の生活を厭う心を詠った詩句は、たとえば、「官情一片春氷薄（官情　一片　春氷のごとく薄し）」（「庚申春題竹渓院壁」第五句）など、竹渓の詩集の中には多く見える。この詩句も彼の実生活での思いを述べたものだろう。大意は次のようになる。「年老いて、役人として働きたいという気持ちがなくなり、衣を翻し、故郷の丘に寝起きすることとなった。そこでは、鶴が雛から丹頂を持つ成鳥へと変化しただけではなく、かつては、まだ子どもだった者が大人になっており、知り合いも多くは白髪の老人となった。しかし、変わらぬものもあり、松はいつもと同じ緑の色を保っており、竹はすっくと伸び、涼しげな陰を作っている。谷あいの百畝の田に穀物を植え、農耕生活を送りながら、酒を飲み、のんびりとした悠々自適の生活を送るのである。これこそ爵位は持たないが、多くの富を持つ、素侯と言うことができるだろう」。なお、落款の「典」は竹渓の名である。

【翻刻】老去宦情冷似秋、払衣帰臥旧林丘。不唯雛鶴化丹頂、定是故人多白頭。秀色可憐松楚々、清陰無改竹修々。渓田百畝知栽秫、又就酔郷成素侯。

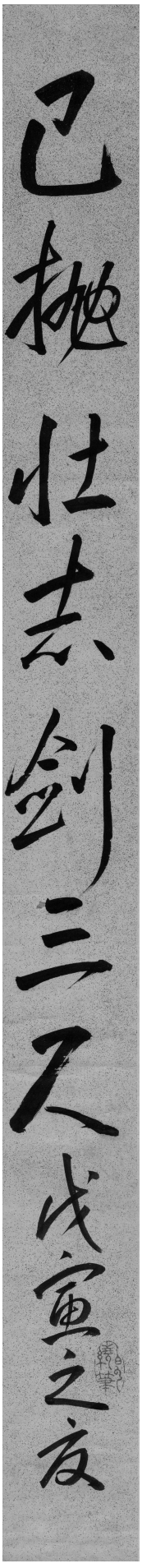
【訓読】老い去りて　宦情　冷やかなること秋に似たり、衣を払ひて　旧の林丘に帰臥す。唯に雛鶴の丹頂に化するのみならず、定めて是れ故人に白頭多からん。秀色　憐れむべし　松の楚々たるを、清陰　改むるなかれ　竹の修々たるを。渓田　百畝　栽秫を知る、又た酔郷に就きて　素侯と成る。

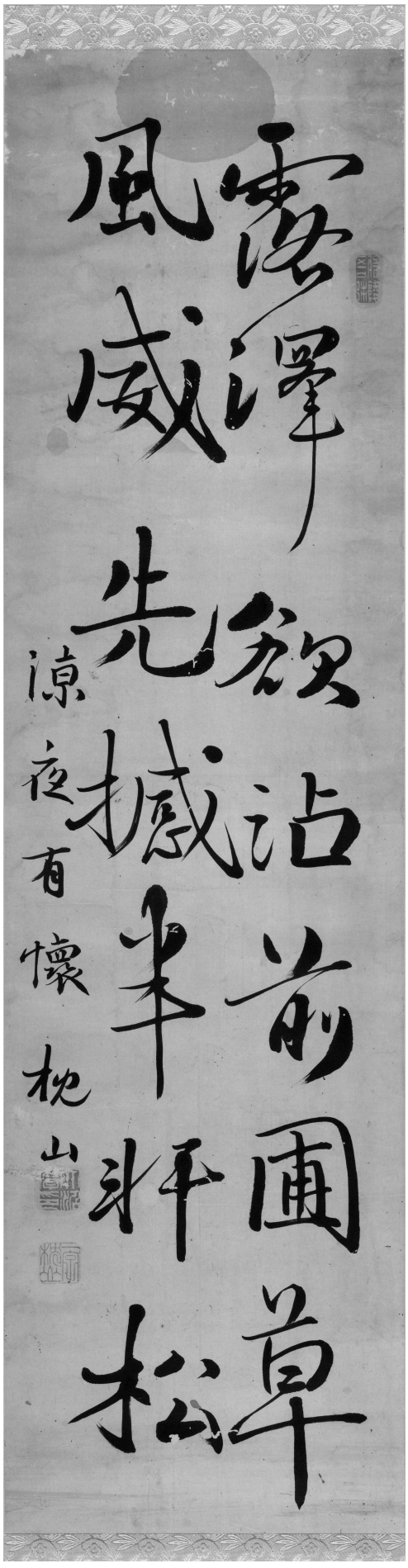
3　大沼枕山対聯（「已抛壮志…」）

枕山が揮毫した対聯。「戊寅之夏」は、明治一一年（一八七八）の夏のことであり、枕山が六十一歳のときに揮毫したもの。「数本の竹に、わだかまりのない、落ち着いた心で向き合う。野心も無くなり、その象徴である三尺の長さの剣も投げ捨ててしまった」といった意味である。老境の心情が表れたとも解し得る。

【翻刻】已抛壮志剣三尺　戊寅之夏　／　且対虚心竹数竿　枕山叟題

【訓読】已（すで）に壮志の剣三尺を抛ちつ、且（か）つ虚心もて竹数竿に対す。　戊寅の夏　枕山叟題す





4 大沼枕山書幅「涼夜有懷」

『枕山詩鈔二編』巻上に収録されている七言律詩「涼夜有懷」の頷聯にあたる。秋の夜の情景について詠っており、しとどに降りた露が、前の畑の草をうるおし、強い風が、軒なかばに伸びる松をまず揺らす、といった意味である。なお、『枕山詩鈔二編』所収の当該句は、「露沢微沾前圃草、風威急撼半軒松（露沢　微かに沾す　前圃の草、風威　急に撼す　半軒の松）」となっており、字句に異同がある。

【翻刻】露沢欲沾前圃草、風威先撼半軒松。涼夜有懷

【訓読】露沢　沾さんと欲す　前圃の草、風威　先づ撼す　半軒の松。「涼夜　懷有り」

5　大沼枕山扁額「存古趣」

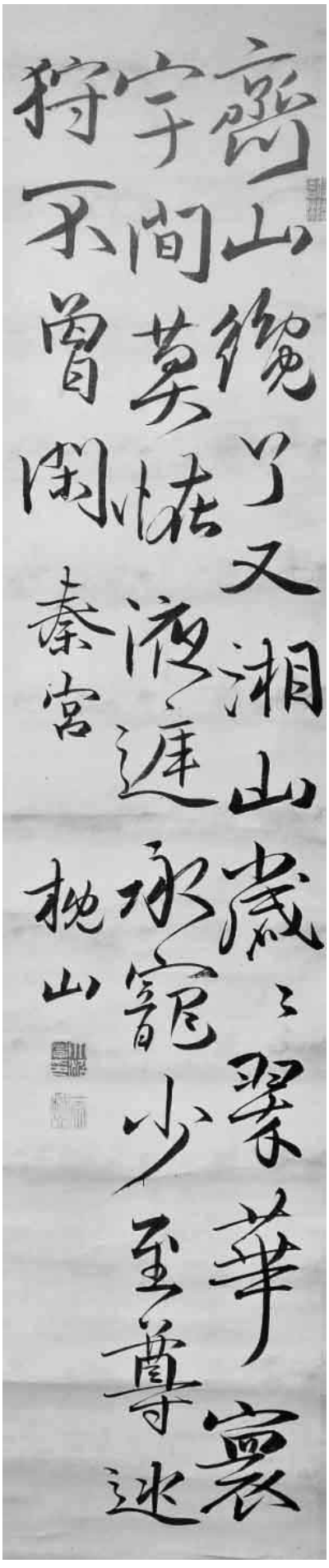
「存古趣」とは、詩や文章が古い趣を持っていて、好ましい、という意。枕山は、豊前の詩人村上仏山の詩集『仏山堂詩鈔』に対する題詞の中で、「截句別然存古趣、田園遣興樂時休（句を截せば　別然として　古趣を存し、田園　興を遣りて　時休を楽しむ）」（「仏山堂詩鈔題言」『枕山詩鈔三編』巻中）と述べており、枕山の理想を表す語の一つであったと考えられる。

【翻刻】存古趣／枕山題　【訓読】古趣を存す／枕山題す

6　大沼枕山扁額「閒邊富貴」

「閒邊富貴（間辺の富貴）」とは、「のどかで余裕のある生活を送ることが、真の富貴と言える」といった意味であると考えられる。江戸後期の漢詩人の間では、「閑中富貴」や「間中富貴」の語を詩題とすることや、また、詩中の表現として用いることが流行した。作詩の便のため、斬新な題を集め、字数（一字題、二字題など）ごとに整理した大窪詩仏編『清新詩題』巻下にも「閑中富貴」の語は掲載されている。おそらく同趣の言葉であろう。明治9年（1876）夏、枕山59歳の揮毫。

【翻刻】閒邊富貴／丙子之夏／枕山厚題　【訓読】間辺の富貴／丙子の夏／枕山・厚　題す



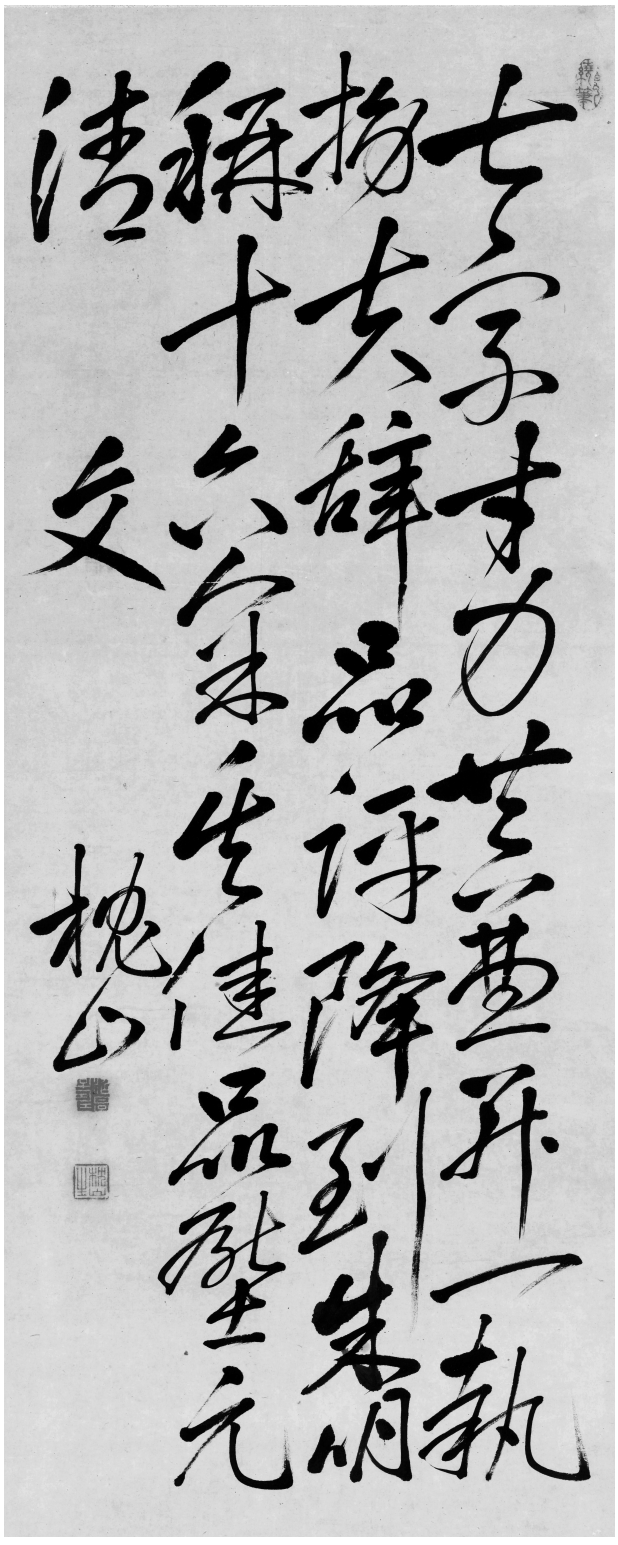
7 大沼枕山書幅（「斉山纔了…」）

「十二宮詞、倣高青邱體（十二宮詞、高青邱の体に倣ふ）」（『枕山詩鈔』巻下）として掲載される十二首の連作詩のうちの「秦宮」である。ただし、部分的に異同がある。『枕山詩鈔』所収の詩は、「湘山纔了又斉山、歳歳翠華寰宇間、莫怪掖庭承寵少、至尊巡狩不曾閒（湘山　纔かに了して　又た斉山、歳々　翠華は寰宇の間にあり、怪しむなかれ　掖庭に寵を承くること少なきを、至尊　巡狩　曾て閒あらず）」となっている。「洞庭湖のほとりの湘山を侵略したと思うと、次は、池州の斉山を攻め、始皇帝の御旗は常に天下を駆け巡っている。このように諸国を巡視し暇がないわけであるから、後宮の女性が寵愛を受けることが乏しいのも致し方ない」と詠っている。「翠華」は天子の御旗のこと。「掖庭」は掖庭宮、すなわち、皇妃や宮女が住むところを意味する。

【翻刻】斉山纔了又湘山、歳々翠華寰宇間。莫怪液庭承寵少、至尊巡狩不曾閑。　秦宮　／　枕山

【訓読】斉山　纔かに了して　又た湘山、歳々　翠華は寰宇の間にあり。怪しむなかれ　液庭に寵を承くること少なきを、至尊　巡狩　曾て閑あらず
秦宮　／　枕山

8 大沼枕山書幅（「七家才力…」）



中国の文の歴史について批評した詩と思われる。詩の前半は、清・沈徳潜の手になる『唐宋八大家文読本』について述べる。この文集には、唐の韓愈と柳宗元、宋の欧陽脩、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石の文が収録されているが、このうち、王安石については、その人格に問題があるとされ、「執拗夫（強情な男）」や「拗相公（つむじ曲がりの大臣）」などと呼ばれていた。このことを踏まえ、『唐宋八大家文読本』は、王安石を除いた七名の文人の才知の働きをすべて収録しているが、その中には、その評価をためらわせるような一人のすね者、すなわち、王安石の作品も混じっていると論じている。

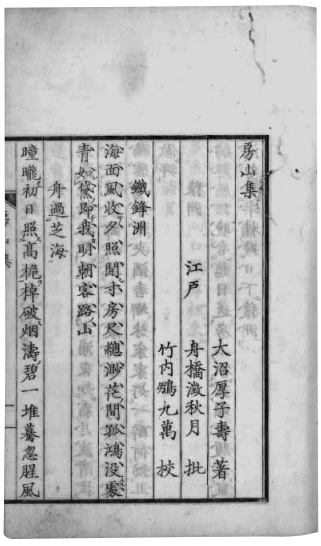
詩の後半では、明代の十六の名家の優れた作品は、元代や清代の文章を圧倒すると主張しているが、これは、明末に編まれた『皇明十六家小品』に収録された十六名の文人（屠隆、徐渭、李維禎、董其昌、湯顕祖、虞淳熙、黄汝亨、王思任、鍾惺、袁宏道、文翔鳳、曹学佺、張鼐、陳仁錫、陳継儒、袁中道）のことを述べていると考えられる。鶴林が編纂した『進徳雑誌』第一集（明治一六年〈一八八三〉八月）中の「雑記」には、「明十六家小品文、世ニ伝フル乏シ。今枕山翁ヨリ得タルヲ以テ、博識一助ノ為メ、佳ナル者壱篇ヅヽ文苑摘英欄内ノ首ニ掲載ス」と記されており、枕山が一時『皇明十六家小品』を所持していたこと、該書が枕山周辺で一時注目を集めたことがうかがえる。

【翻刻】七家才力共兼幷、一執拗夫辞品評。降到朱明称十六、采其佳品圧元清。／文／枕山

【訓読】七家の才力　共に兼幷するも、一の執拗夫あるによりて　品評を辞す。降つて朱明に到りて　十六を称し、其の佳品を采りて　元　清を圧す。／文／枕山

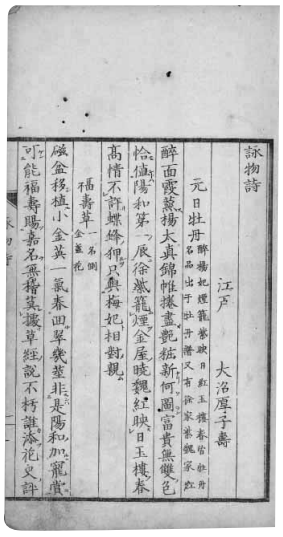
9 大沼枕山著『房山集』
天保九年（1838）序　半紙本　1冊

天保８年（1837）秋から冬にかけて、20歳の枕山は房総を遊歴し、その時に作った詩をまとめた詩集である。菊池五山、塩田随斎らの引、宮沢雲山、梁川星巌らの題詞などが付され、年若くして、錚々（そうそう）たる面々から、詩人としての力量を認められていたことが分かる。


房山集
江戸　大沼厚子壽著
舟橋澂秋月　批
竹内鴎九萬　挍
鐵鋒洲
海面風收外照聞水房尽總渺茫聞鄰鴻没憂
青妙黛聊我明朝客路吉
舟過芝海
曈曨初日照高桅樟破烟濤碧一堆暮忽腥風

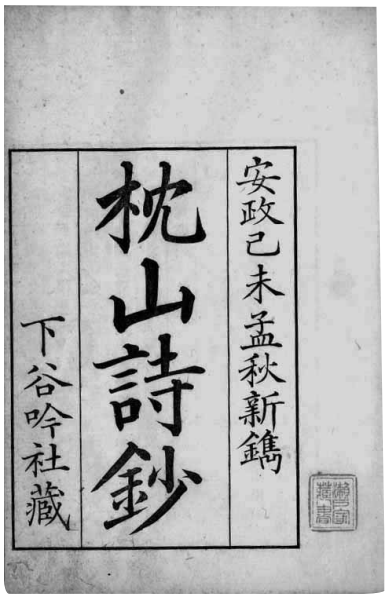
10 大沼枕山著『枕山詠物詩』
天保11年（1840）刊　半紙本　1冊

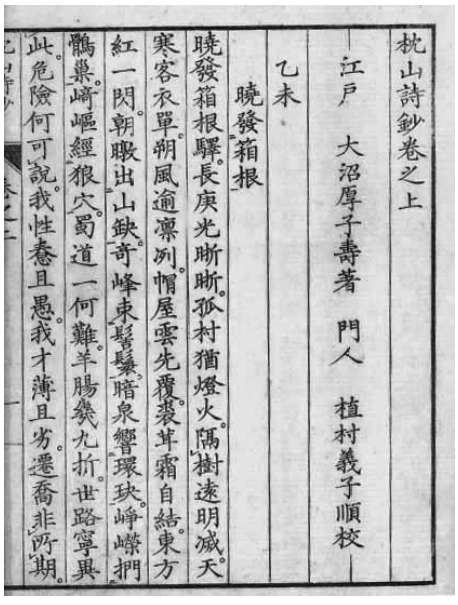
天保11年（1840）に、枕山は、『房山集』に続く自身の第２集として、詠物詩約100首を集めた『詠物詩』（内題による、外題は「枕山詠物詩」）を刊行した。その後、弘化３年（1846）に、それを計178首に増補し、さらに、親交のあった梅痴の詠物詩164首を集めた『梅痴詠物詩』と合刻再版した。本資料は、天保11年の版。


詠物詩
江戸　大沼厚子壽
元日牡丹
醉面霞蒸揚大真錦帷攘盡艷猶新何圖富貴無雙色
恰偶陽和第一辰徐嫩籠煙金屋曉魏紅映日玉欄春
高情不許蝶蜂得只與梅妃相對親
福壽草
碎金移植小金英一氣春回翠甃莖非是陽和加寵賞
可能福壽賜嘉名無稽莫識草經說不朽誰淹花史詩

11 大沼枕山著『枕山詩鈔初編』 安政6年（1859）以降刊　大本3卷3冊

枕山の詩をおおむね制作年の順に収録した詩集。初編・二編・三編がある（各編ともに3卷3冊）。『枕山詩鈔初編』は、天保6年（1835）から嘉永3年（1850）までの詩を掲載している。この『枕山詩鈔』には、多くの版があり、埋木などによって本文の修訂が繰り返されていることが、内田賢治氏の研究によって明らかになっている（「『枕山詩鈔』の版木及び本文校訂」『太平詩文』62号、2014年８月）。本資料は、内田氏による分類では、諸本B（諸本AからFまでの6種類に分類、諸本Bは国文学研究資料館ナ八／196／1-3などと同じ版）にあたる。なお、今回寄託された資料には、大本のほかに、半紙本の『枕山詩鈔初編』もある。今、異同のある箇所（初編巻1ウ・4行目）を以下に示す。


安政己未孟秋新鐫
枕山詩鈔
下谷吟社藏


枕山詩鈔卷之上
江戸　大沼厚子壽著　門人　植村義子順校
乙未
曉發箱根
曉發箱根驛長庚光晰晰孤村猶燈火隔樹遠明滅天
寒客衣單朔風逾凜冽帽屋雲先覆裘茸霜自結東方
紅一閃朝暾出山缺奇峰束髮髮暗泉響環玦崢嶸捫
鶴巢崎嶇經狼穴蜀道一何難羊腸幾九折世路寧異
此危險何可說我性惷且愚我才薄且劣遷喬非所期

大本B

可嗟多時忘羈愁客心自凄澈通天鶴一聲詩思冲寥
←「澈」になっている。

半紙本

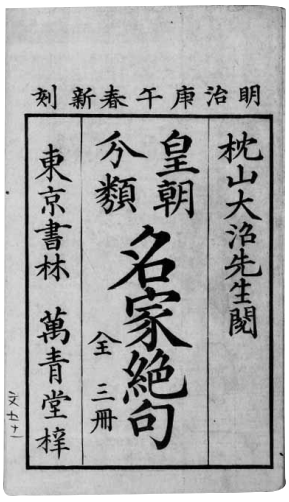
可嗟多時忘羈愁客心自凄澈通天鶴一聲詩思冲寥
←「澈」に改められている。

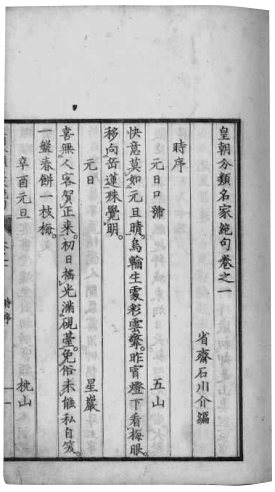
12 石川省斎編『皇朝分類名家絶句』明治3年（1870）刊　合1冊（5巻）

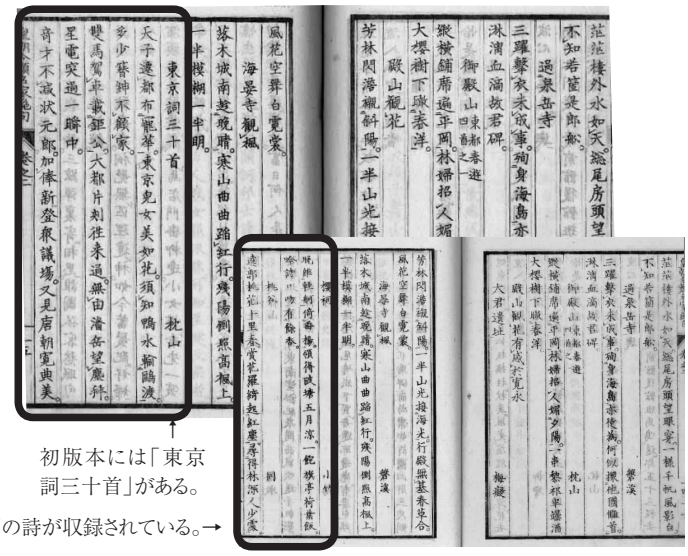
石川省斎（小説家の石川淳の祖父）によって編纂された詞華集。江戸時代中後期の詩人の作を、巻ごとに「時序」、「名勝」、「詠史」、「詠物」、「題画」に分類し収録する。本書見返しには、「枕山大沼先生閲」と記され、また、枕山の序（明治3年3月）が付されている。

本資料が、枕山研究において重要であるのは、枕山の「東京詞」の当時の社会の反応を、その版面の改修からうかがうことができるからである。斎田作楽氏が（「「東京詞」と『皇朝分類名家絶句』」『太平詩文』６号、1997年６月）において指摘するとおり、本書には初版本と改版本があり、初版本においては巻中の十四丁オから十八丁オの間に掲げられていた「東京詞三十首」が、改版本では削除されている（本資料は初版本）。

「東京詞」は、維新当初の混乱する世相を詠った詩であり、高位高官を諷刺する詩篇を含んでいたため、弾正台（政府の司法機関）から糾問されたことが、信夫恕軒の「大沼枕山伝」（『恕軒遺稿』）に記されている。ただ、以前は、その具体的な証拠が見つかっていなかった。『皇朝分類名家絶句』に版木の修改が見つかったことにより、「東京詞」が世の忌避に触れる面が実際に存在したことが明らかになったのである。





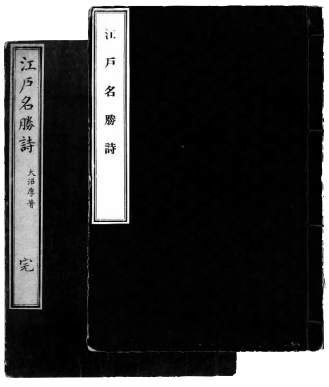


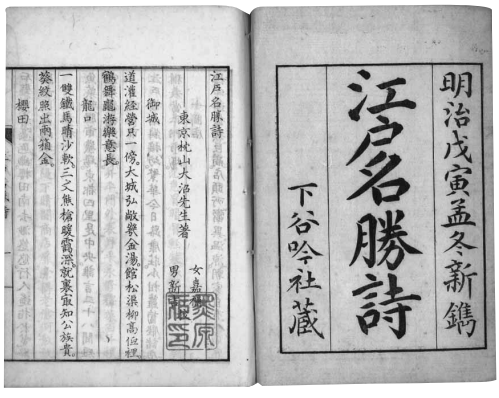
初版本には「東京詞三十首」がある。

改版本では、「東京詞三十首」があった箇所に、別の詩が収録されている。→

13 大沼枕山著『江戸名勝詩』明治11年（1878）刊　半紙本1冊

枕山の詩集。江戸の町や地域、名所を詠った七言絶句約100首を収録する。寄託された資料の中には、青の表紙で、外題が「江戸名勝詩　大沼厚著　完」となっているもの（見返しあり、「明治戊寅孟冬新鐫／江戸名勝詩／下谷吟社蔵」と刻される）と、黒の表紙で、外題が「江戸名勝詩」のみのもの、（見返しなし）の２点がある。黒の表紙の本の方がやや刷りが粗い。





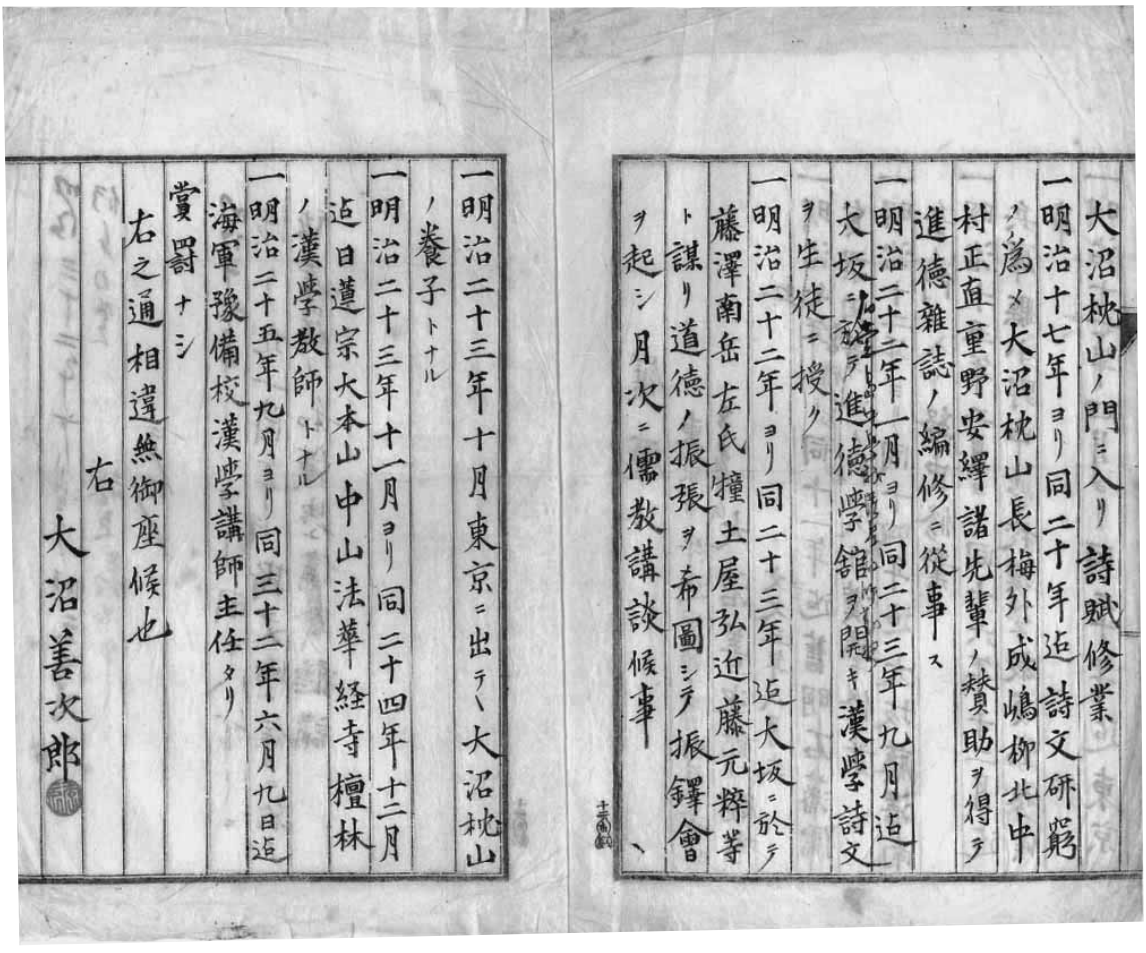
Ⅱ　鶴林・嘉年と明治の社会

14　大沼善次郎（鶴林）履歴書
明治32年頃（1899）作成

鶴林の履歴書。明治32年（1899）までの事績が記されている。署名・押印があり、いずれかの機関に提出するために作られたものと考えられるが、一方で、細字で訂正や書入れなどもなされている。完成したもののうち一通を手控えなどとし、後に修正を書き加えたものか。

履歴書中には、「文久三年八月生」、「明治二十三年十月東京ニ出デ、大沼枕山ノ養子トナル」など、鶴林の前半生における足跡が詳細に記されているが、他の史料から判明する彼の行動と若干の齟齬が確認できる部分もある。たとえば、在京中の活動について、「明治十七年ヨリ同二十年迄詩文研窮ノ為メ大沼枕山、長梅外、成島柳北、中村正直、重野安繹諸先輩ノ賛助ヲ得テ進徳雑誌ノ編輯ニ従事ス」と記されているが、『進徳雑誌』は、明治16年（1883）８月の創刊である。文中には訂正が施されている箇所もあり、鶴林の伝記資料として取り扱う場合には、注意が必要である。

履歴
東京市牛込區簞笥町三十二番地
大沼善次郎　鶴林
文久三年八月生
一明治七年ヨリ同十一年迄舊明石藩儒
貧梁田蛻洲ノ門ニ入リ漢學修業
一明治十二年ヨリ同十四年迄大坂藤澤南
岳ノ門ニ入リ經史修業
一明治十五年二月ヨリ同十六年十二月迄
兵庫縣小野中學校漢學教員勤務候
事
一明治十七年四月ヨリ同二十年迄東京


大沼枕山ノ門ニ入リ詩賦修業
一明治十七年ヨリ同二十年迄詩文研窮
ノ爲メ大沼枕山長梅外成嶋柳北中
村正直重野安繹諸先輩ノ賛助ヲ得テ
進德雜誌ノ編修ニ從事ス
一明治二十二年一月ヨリ同二十三年九月迄
大坂ニ於テ進德學館ヲ開キ漢學詩文
ヲ生徒ニ授ク
一明治二十二年ヨリ同二十三年迄大坂ニ於テ
藤澤南岳左氏撞土屋弘近藤元粹等
ト謀リ道德ノ振張ヲ希圖シテ振鐸會
ヲ起シ月次ニ儒教講談候事
一明治二十三年十月東京ニ出テ、大沼枕山
ノ養子トナル
一明治二十三年十一月ヨリ同二十四年十二月
迄日蓮宗大本山中山法華經寺檀林
ノ漢學教師トナル
一明治二十五年九月ヨリ同三十二年六月九日迄
海軍豫備校漢學講師主任タリ
賞罰ナシ
右之通相違無御座候也
右
大沼善次郎

15　九月六日沢田善次郎（大沼鶴林）宛長梅外書簡　明治17年（1884）頃か

若年期の鶴林に宛てた、長梅外（文化7年〈1810〉～明治18年〈1885〉）の書簡。梅外は、幕末・明治期に活躍した儒者。広瀬淡窓に学んだ後、萩藩校教授となり、尊王攘夷運動にも参加した。維新後、上京し、鶴林と深い交わりを結んだ。

書簡の内容であるが、梅外は、鶴林が病から回復したかを問うている。追伸の箇所にある「詩文詳解」とは、明治10年代、多く読まれた漢詩文雑誌『古今詩文詳解』のことであろう。やや解しがたい箇所があるが、梅外は、自身の著述『在邇録』の出版について、『古今詩文詳解』を発行していた成章社に任せる旨を承知したというように読める。なお、『在邇録』は、すでに以文会友社から、明治17年（1884）2月に刊行されている。

本書状の発信の時期についてであるが、以文会友社は、鶴林が編集に従事した『進徳雑誌』の発行母体であるが、『進徳雑誌』の奥付を見ると、14号（明治17年５月）以降、その所在地を、京橋区南佐柄木町七番地から、下谷区中御徒町3丁目71番地（すなわち、枕山の自宅である。鶴林が枕山宅に下宿し、事務所として使ったなどの事情が考えられる）へと移している。封書の宛先には、中御徒町と記されているので、本書状は明治17年春以降に出されたものであろう。

【翻刻】

一翰啓上仕候。時々催涼凌ギ好ク相成候処、貴恙如何、一向ニ存不申、先日書状御社へ呈し候処、御入院之趣、御容躰は如何ニ御座候哉。何分御加養専一ニ奉存候。先者御尋問申上度、如斯ニ御座候。草々頓首

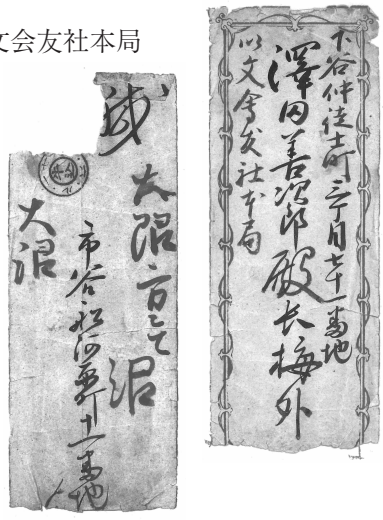
九月六日　　長梅外

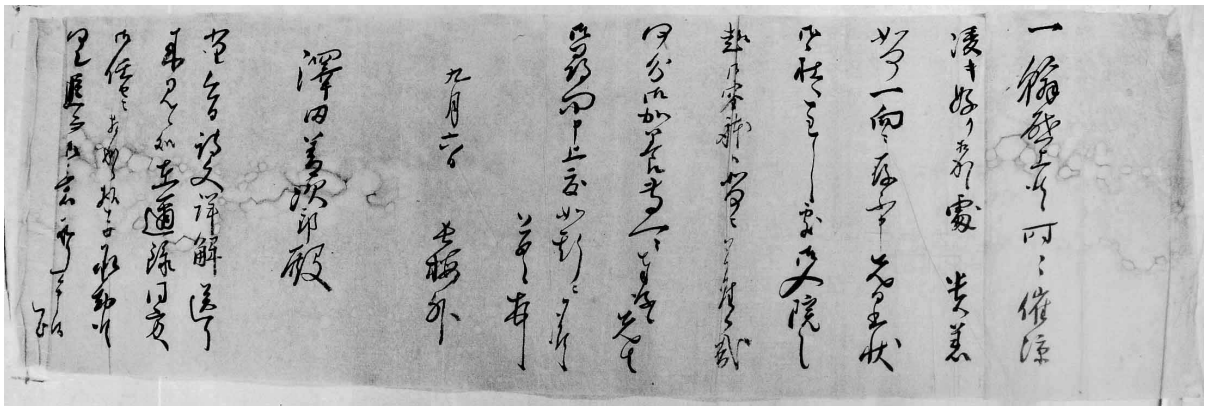
澤田善次郎殿

尚々今日詩文詳解送り来、見候処、在邇録同方へ御任せと相成り様子御承知仕候。何レ追而御意承り可申候　以上

（封書表）　下谷仲徒士町三丁目七十一番地／澤田善次郎殿　長梅外／以文会友社本局

（封書裏）　大沼方にて　沼／市谷船河原町十一番地／大沼



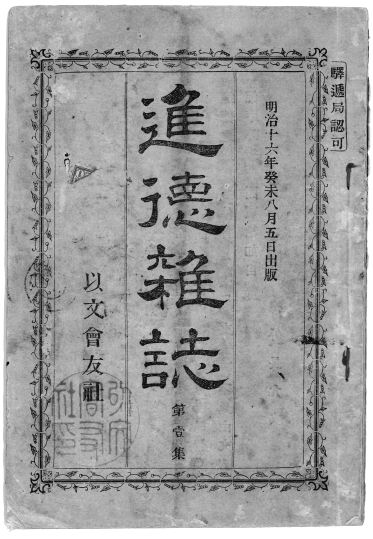


16 長梅外輯解『在邇録』 明治34年（1901）刊　半紙本　2巻2冊

『在邇録』は、『論語』『孟子』や『詩経』などの基本書から、長梅外が心にかなった箇所を抜き出し、解説を付したもの。明治17年（1884）に以文会友社から刊行された後、明治34年（1901）に発行所が雅正吟社（鶴林の吟社）、発売所が新声社のかたちで再版された。新声社は、後の新潮社を興す佐藤義亮が経営していた出版社。鶴林は、明治29年（1896）以降、雑誌『新声』の漢詩欄を担当するなど、新声社と関わりが深かった。

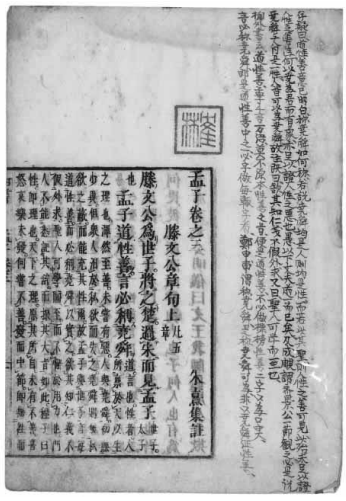
17 『進徳雑誌』第1集 明治16年（1883）8月　〔個人蔵〕

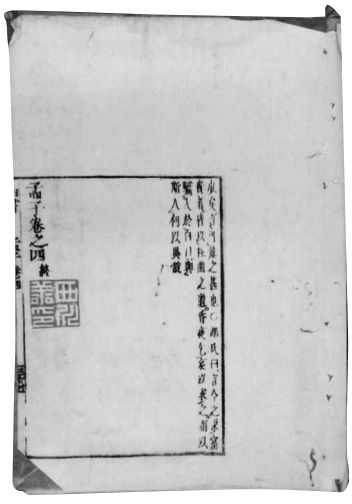
若き日の大沼鶴林が、その編集発行に尽力した雑誌。20号（明治17年〈1884〉10月）までの刊行が確認できる。第１集は、巻頭には、長梅外の題詞、枕山による「以文会友　癸未之夏　枕山題」の書が掲げられ、「論説」「文苑摘英」「詩歌拾珠」「風雅餘薫」「雑記」の欄が続く。梅外の詩話や袁宏道らの小品文が連載されている点も興味深い。



18 小松版四書集註 （『大学章句』、『中庸章句』、『孟子』巻3･4） 江戸後期刊か　半紙本　存2冊

小松版の四書は、欄外の余白が大きく取られており、ここに書入れを施しながら、勉強するのが常であった。本資料にも、中国、日本の『論語』の注釈からの抄出が欄外に記されている。「鶴林」の印のほか、「西川善印」の印が押されている（大沼家に養子となる前に、鶴林は西川姓であった）ので、書入れは若い頃の鶴林のものか。



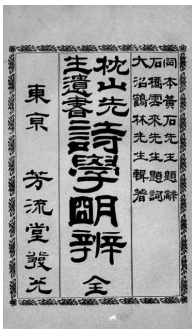


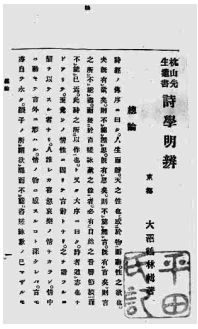
19　大沼鶴林輯著『枕山先生遺書　詩学明辨』明治29年（1896）刊　菊判　1冊

鶴林が、若年期に長梅外や大沼枕山から受けた教えについての記録や、枕山の蔵書から行った抜き書きなどをもとに、解説を加えたもの。自序に「此編ハ往年枕山梅外両先生ニ親炙シテ循々善誘ヲ受クルノ時、己ガ三復ノ為メ聞クニ随テ筆シ、又自ラ熙熙堂蔵書ニ就キ、吾意ニ適フ所ヲ抄録且ツ評釈セシモノ」とあり、著述の経緯が分かる。

本書は、「総論」、「原詩」、「変遷」、「功能」、「詩箴」、「詩界」、「象境」などのテーマごとに、中国・日本の詩についての考え方を論じた文章を抜萃紹介するものであるが、後半では、より実用的な詩学作法書としての性格が濃くなる。これは、後に鶴林が、「曩キニ余ノ詩学明辨ヲ著ハスヤ、友人ノ忠告亦タ此ノ如シ（注　難しすぎるので、平易な内容にしてほしいという要望があったことを指す）。因テ後半ハ刪リテ卑近ニ改メタリ」（「雅正軒詩話　第五」、『新声』２巻４号、明治30年〈1897〉４月）と回想していることからも分かるとおり、やや難解であるという読者の評価に対応したものであろう。

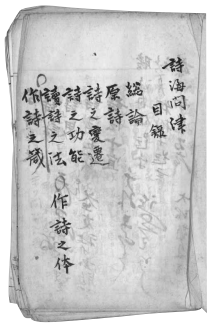
枕山の関わる事柄としては、清・趙翼『甌北詩話』巻６中の「言簡意深、一語勝人千百（言は簡にして意は深く、一語にして人の千百に勝る）」という言葉に、枕山が感銘を受けていたこと（23頁、なお、この言葉は、『枕山七言絶句』自序などにも引用される）、また、枕山が、当時の漢詩人について、世俗のことばかり考えながら、それとは無関係な風流雅事を詠うので、「気乏ク力弱シテ、所謂纖弱ニ陥ル」と批判したことなどが記されている。





20　『詩海問津』明治10～20年代か　写1冊

鶴林の手になる、詩についての考え方を記した稿本。「詩海問津」（外題は「古今詩海問津」という題が付けられているが、実際には、『枕山先生遺書　詩学明辨』前半部の原稿と考えられる。刊行された『枕山先生遺書　詩学明辨』には、岡本黄石の題辞、石橋雲来の題詞が載るが、この草稿本には、勝海舟の題字、秋月種樹の題言、藤沢南岳の序などが掲げられる予定であったことが記されている。例言や本文にも相当の改変が加えられている。たとえば、本資料を見ると、元々「古来和漢ニ詩歌アルノミナラズ。欧米ト雖モ亦詩アリテ且ツ詩人ヲ貴ブト聞ケリ」と記されている箇所が、「古来和漢洋何レノ国ト雖ドモ、苟モ人ノ棲息スル所トシテ、詩歌ナキコト能ハザル所以ナリ」と修正され、そのまま刊本に引き継がれていることが分かる。西洋文学をどう位置付けるかということに対して、鶴林が敏感であったことがうかがえる。



21 「枕山詩話」稿本　写1冊

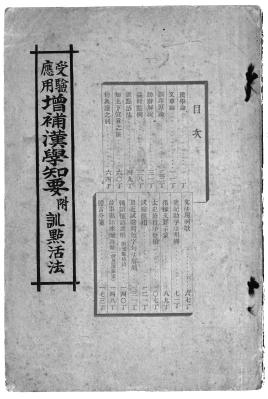
鶴林によって作成された、枕山の詩話の稿本。巻頭に「枕山詩話　受業　鶴林手録」と記されている。長短合わせて十七条の詩について枕山の考えを記録した文章が収録されている。「詩経ハ詩ノ本源ナレバ第一ニ之ヲ読マザル可ラズ」などと、枕山が語ったかのように書かれているが、おそらく、鶴林が自身のノートや記憶を再構成したのであろう。本資料は、書籍の稿本と考えられるが、実際に出版されたかどうかは不明である。稿本の末尾に『枕山先生遺書　詩学明辨』の再版本についての広告案を記しているので、同書が刊行された明治29年（1896）以降に作成された可能性が高い。

22 「熙熙堂詩話」稿本　写1冊

鶴林によって作成された、枕山の詩話の稿本。漢字片仮名交じりの文章で記されている。「熙熙堂」は枕山の別号。断簡の資料であり、『詩経』、「古詩十九首」、七言詩に関する三条の記事のみが残っている。冒頭に「余ガ詩ヲ話スル、体ノ古今ヲ区別セズ、人ノ前後ヲ順序セズ。思ヒ出スニ任セ、之ヲ録セシム。見ル人、請フ一則一則ニ就キ、其意ヲ了シテ可ナリ」と書かれており、枕山が意識的に自らの詩についての考えについて述べたものを、鶴林が記録したと考えられる。なお、雑誌『天則』（第8編第5・6号、明治28年6・7月）に、「故大沼枕山」の名で「熙々堂詩話」が連載されているが、これは、記述の形式や内容などの点で本資料と齟齬があり、別のものと考えられる。

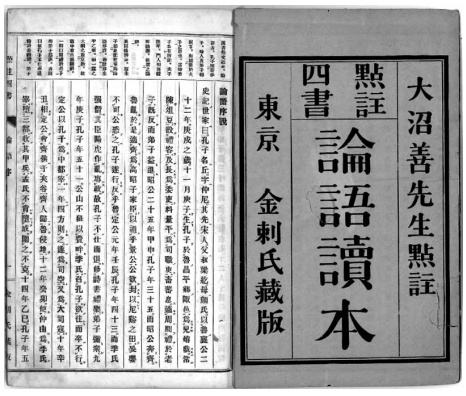
23 大沼鶴林著『漢学知要（初版）』
明治30年（1897）刊　菊判　1冊　〔個人蔵〕

本書は、鶴林が編んだ受験対策用の漢文参考書。内容は、「漢学論」「文章論」などの総説的な文章に始まり、「助辞解説」などのより実践的な知識が説明される。貝原益軒の『点例』や荻生徂徠『訓訳示蒙』など、江戸時代の儒者の著述なども参照されている。見返しには「海軍予備校漢学教頭　大沼鶴林先生著／漢学知要　附訓点活法／東京　金刺氏発兌」とある。金刺氏は、金刺源次（神田今川小路一丁目五番地）のこと。



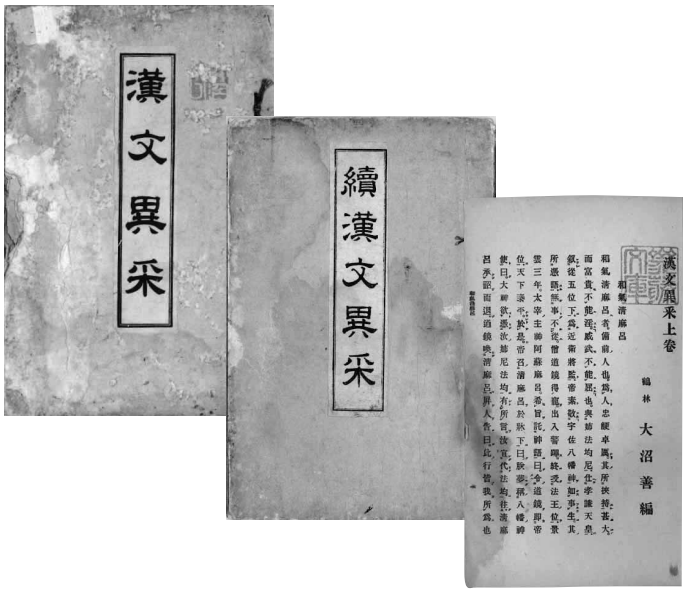
24 大沼鶴林著『漢学知要（第三版）』
明治34年（1901）刊　菊判　1冊　〔個人蔵〕

初版から増補がなされ、表紙の題は「受験応用増補漢学知要　附訓点活法」と改められている。新たに付された「第三版緒言」は、鶴林の青年期の事跡や漢学復興のための活動の足跡を知る上で貴重な情報を含んでいる。



25 大沼鶴林点注『点註四書　論語読本』
明治30年（1897）刊　菊判　1冊

鶴林の手になる『論語』注解書。頭注欄に、鶴林自身による説明や、諸書から抄出した注解が掲げられている。

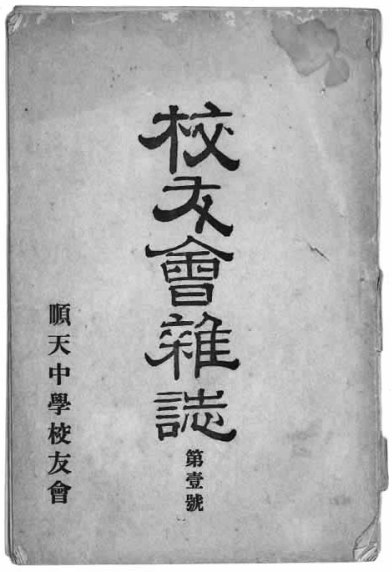


26 大沼鶴林編『漢文異采』『続漢文異采』
明治32年（1899）刊　菊判　各1冊

大沼鶴林が編んだ漢文教科書。日本や中国の有名な歴史人物ごとにまとめるなど、親しみやすい構成にしている。『史記』項羽本紀、諸葛亮「前出師表」などの定番の教材に加え、『本朝文粋』、林鵞峰『本朝言行録』、安東省庵『三忠伝』など、日本の漢文作品からも多くの材を取っている。詩では、藤田東湖「正気歌」や大沼枕山「小楠公」（『枕山詩鈔』巻上）などが掲載されている。

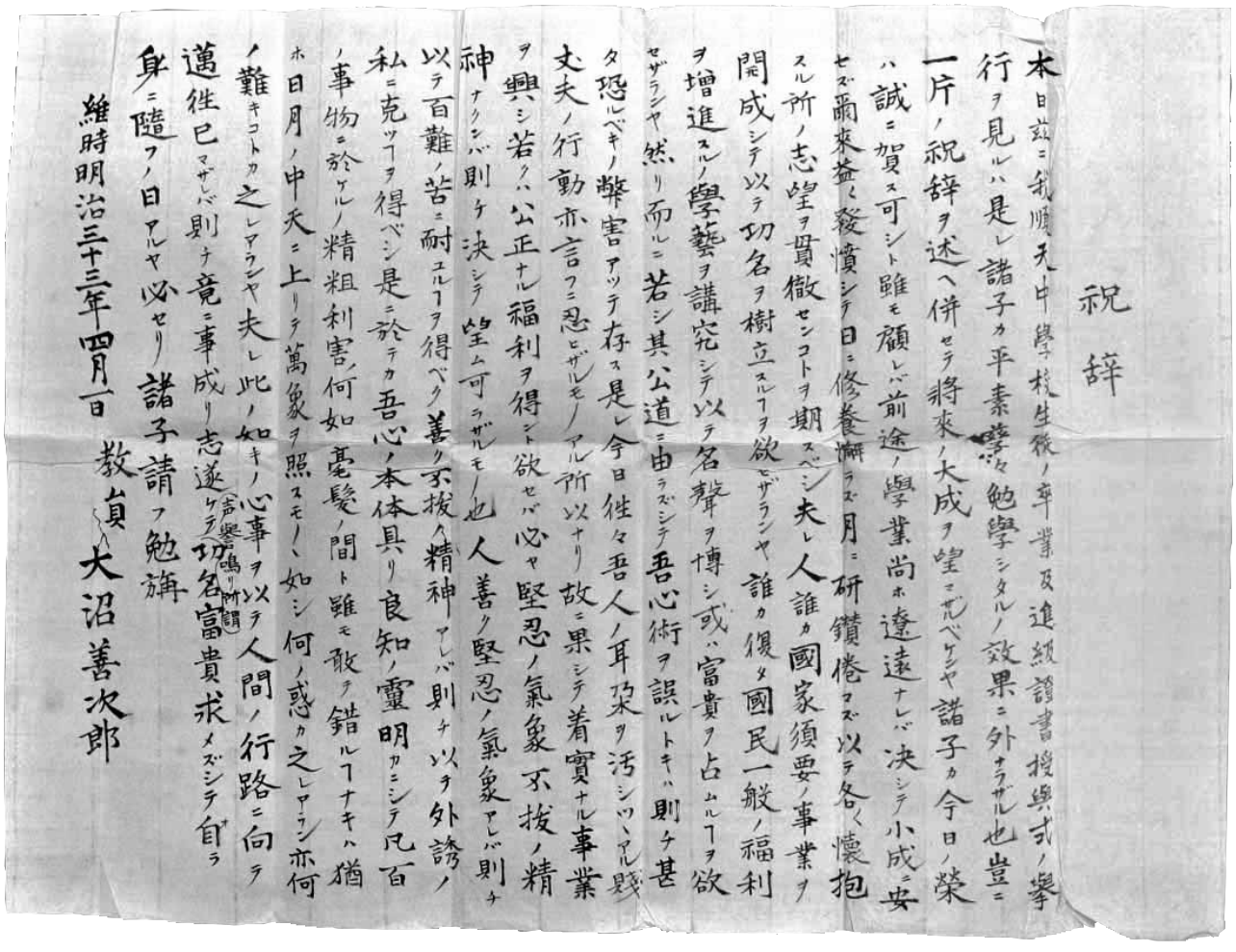
27 順天中学校友会『校友会雑誌』第壱号
明治36年（1905）2月刊　1冊

鶴林は、明治32年（1899）以降、江戸末期に活躍した福田理軒（文化12年〈1815〉～明治22年〈1889〉）によって設立された順天中学に漢文及び道徳の教員として勤務することとなる。本資料は、順天中学の校友会雑誌。鶴林は、漢詩「偶感」と、漢文「以文会友社記」を寄稿している。



28 順天中学祝辞原稿　明治33年（1900）　写1枚

明治33年（1900）4月1日に行われた順天中学における卒業証書及び進級証書授与式の祝辞。中学に教員として勤務した鶴林にとって、時々の祝辞の草稿を制作することは、日々の業務でもあった。本資料において、彼は、「着実ナル事業ヲ興シ若クハ公正ナル福利ヲ得ント欲」するならば「必ヤ堅忍ノ気象不抜ノ精神」が必要であると説き、学生たちに期待の意を表している 。



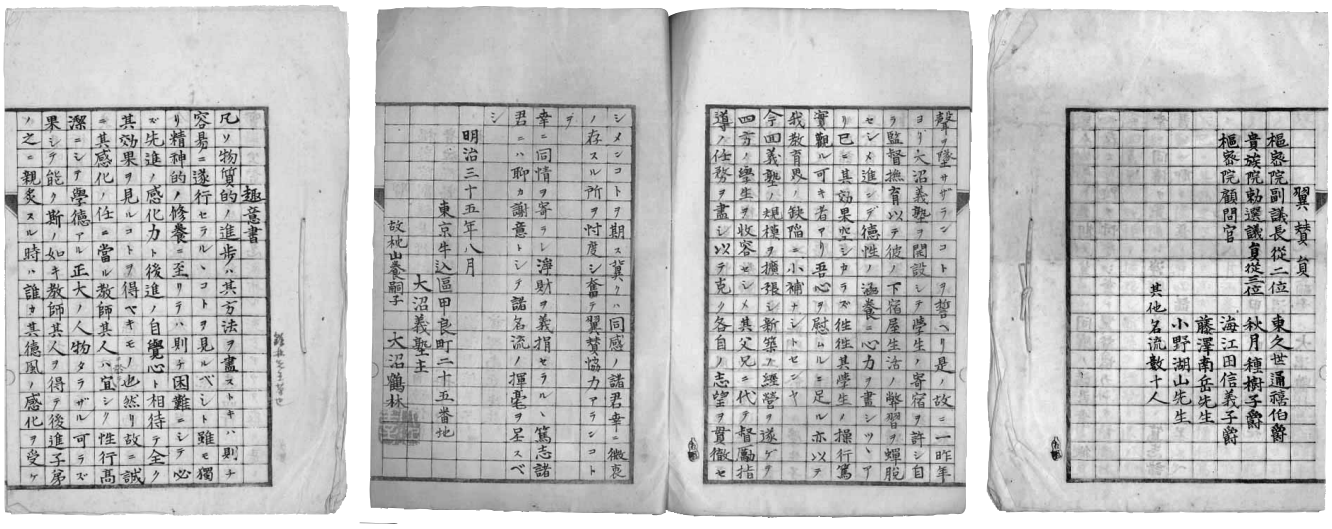
祝辞

本日茲ニ我順天中學校生徒ノ卒業及進級證書授與式ノ擧行ヲ見ルハ是レ諸子カ平素孳々勉學シタルノ效果ニ外ナラザル也豈ニ一片ノ祝辞ヲ述ヘ併セテ將來ノ大成ヲ望ニザルベケンヤ諸子カ今日ノ榮ハ誠ニ賀ス可シト雖モ顧レバ前途ノ學業尚ホ遼遠ナレバ決シテ小成ニ安ヒズ爾來益々發憤シテ日ニ修養怠ラズ月ニ研鑽倦マズ以テ各々懷抱スル所ノ志望ヲ貫徹センコトヲ期スベシ夫レ人誰カ國家須要ノ事業ヲ開成シテ以テ功名ヲ樹立スルヿヲ欲セザランヤ誰カ復タ國民一般ノ福利ヲ增進スルノ學藝ヲ講究シテ以テ名聲ヲ博シ或ハ富貴ヲ占ムルヿヲ欲セザランヤ然リ而ルニ若シ其公道ニ由ラズシテ吾心術ヲ誤ルトキハ則チ甚タ恐ルベキノ弊害アッテ存ス是レ今日往々吾人ノ耳朶ヲ汚シツヽアル賤丈夫ノ行動亦言フニ忍ビザルモノアル所以ナリ故ニ果シテ着實ナル事業ヲ興シ若クハ公正ナル福利ヲ得ント欲セバ心ヤ堅忍ノ氣象不拔ノ精神ナクンバ則チ決シテ望ム可ラザルモノ也人善ノ堅忍ノ氣象アレバ則チ以テ百難ノ苦ニ耐ユルヿヲ得ベク善ク不拔ノ精神アレバ則チ以テ外誘ノ私ニ克ツヿヲ得ベシ是ニ於テカ吾心ノ本体具リ良知ノ靈明カニシテ凡百ノ事物ニ於ケルノ精粗利害何如毫髮ノ間ト雖モ敢テ錯ルヿナキハ猶ホ日月ノ中天ニ上リテ萬象ヲ照スモノヽ如シ何ノ惑カ之レアラン亦何ノ難キコトカ之レアランヤ夫レ此ノ如キノ心事ヲ以テ人間ノ行路ニ向テ邁往已マザレバ則チ竟ニ事成リ志遂ケテ功名富貴求メズシテ自ラ身ニ隨フノ日アルヤ必セリ諸子請フ勉旃

維時明治三十三年四月一日　教員　大沼善次郎

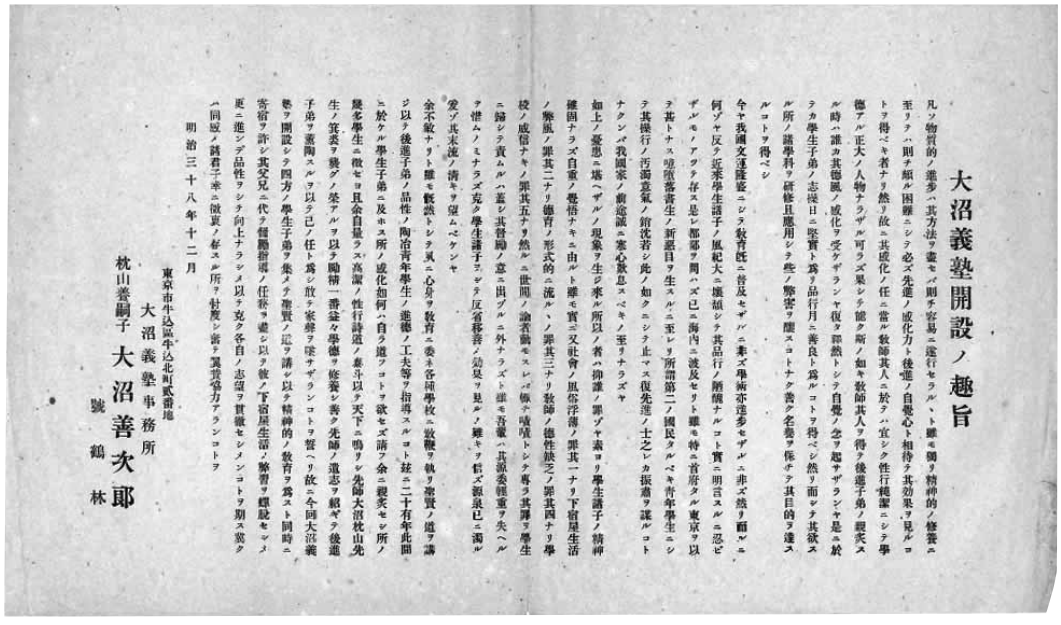
29　大沼義塾趣意書　明治35年（1902）　写1冊

鶴林が自らの経営する大沼義塾の理念を述べ、賛意を求めるために作成した趣意書。鶴林は、物質的な進歩の中で、近年の若者は「精神的ノ修養」が疎かになり、風紀が乱れていると指摘し、学生に正しい生活を送り、道徳心を養ってもらうために、義塾を開いたと述べている。その上で、新たに校舎を新築し、義塾の規模を拡張するため、義援金を求めることが記されている。なお、文中に「一昨年ヨリ大沼義塾ヲ開設シ」とあるので、実際に、大沼義塾が創設されたのは、明治33年（1900）の頃であろう。本資料末尾には、翼賛員として、東久世通禧、秋月種樹、海江田信義、藤沢南岳、小野湖山らの名が記されており、一定の支持を得ていたことがうかがえる。文末に、「明治三十五年八月／東京都牛込区甲良町二十五番地　大沼義塾主／故枕山嗣子　大沼鶴林善敬白」と記されている。



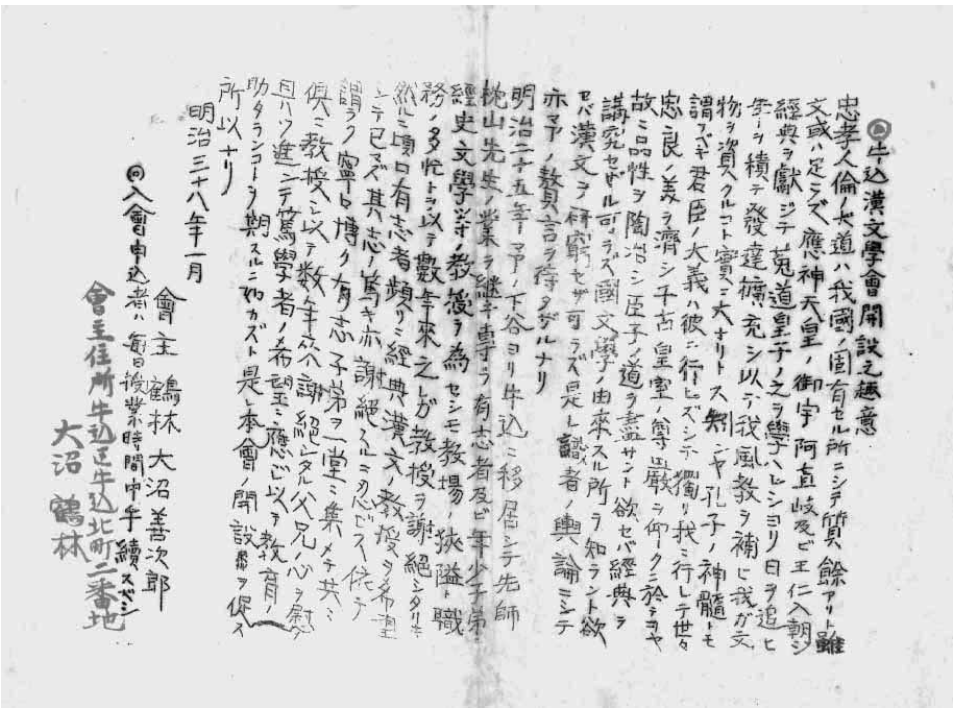
30　「大沼義塾開設ノ趣旨」明治38年（1905）　活版1枚

先に見た趣意書とほぼ同じ内容であるが、活版で印刷され、文面が一部変更されている。明治38年12月の日付が記され、大沼義塾の所在地が「牛込区牛込北町弐番地」に変わっている。



31 「牛込漢文学会開設之趣意」明治38年（1905） 謄写版1枚

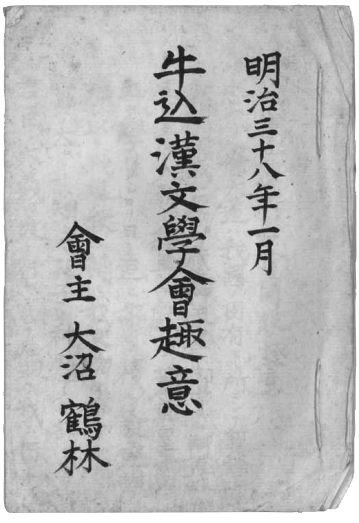
鶴林が新たに牛込漢学会を開く際に記した趣意書。鶴林は、忠孝や君臣の大義が日本の社会・文化に固有の徳目であると述べ、その理解のために漢学を研究することが必要であると主張している。その上で、自身は、明治25年（1892）に下谷から牛込に移居して以来、有志者と年少子弟の教育に従事してきたが、繁忙のため、十分に対応できなかったと述べ、今後はこの牛込漢学会を開き、学ぶ意欲を持つ者の教育にあたりたいと説いている。「明治三十八年一月　会主　鶴林　大沼善次郎」と署されている。

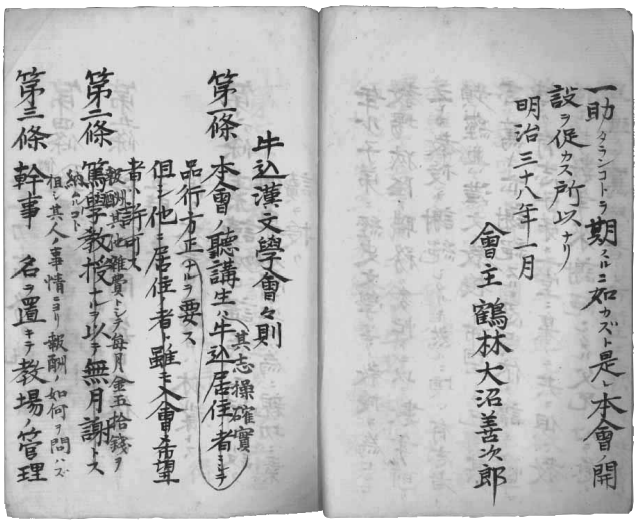

牛込漢文學會開設之趣意

忠孝人倫ノ大道ハ我國ノ固有セル所ニシテ質餘アリト雖
文或ハ足ラズ應神天皇ノ御宇阿直岐及ビ王仁入朝シ
經典ヲ獻ジテ菟道皇子之ヲ學ハレシヨリ日ヲ追ヒ
年ヲ積テ發達擴充シ以テ我風教ヲ補ヒ我ガ文
物ヲ資ヘルコト實ニ大ナリトス然ルニ孔子ノ神髓トモ
謂フベキ君臣ノ大義ハ彼ニ行ヒズシテ獨リ我ニ行レテ世々
忠良ノ美ヲ濟シ千古皇室ノ尊嚴ヲ仰クニ於テヲヤ
故ニ品性ヲ陶冶シ臣子ノ道ヲ盡サント欲セバ經典ヲ
講究セザル可ラズ國文學ノ由來スル所ヲ知ラント欲
セバ漢文ヲ研窮セザル可ラズ是レ識者ノ輿論ニシテ
亦予ノ教員言ヲ待タザルナリ
明治二十五年ヲ以テ下谷ヨリ牛込ニ移居シテ先師
桃山先生ノ業ヲ繼キ專ラ有志者及ビ年少子弟ノ
經史文學等ノ教授ヲ爲セシモ教場ノ狹隘ト職
務ノ多忙トヲ以テ數年來之レガ教授ヲ謝絕シタリキ
然ルニ頃日有志者頻リニ經典漢文ノ教授ヲ希望
シテ已マズ其志ノ篤キ亦謝絕スルニ忍ビズ依テ
謂フ寧ロ博ク有志子弟ヲ一堂ニ集メテ共ニ
俱ニ教授シ以テ數年來ノ謝絕シタル父兄ノ心ヲ慰ム
ルハ遊ンデ篤學者ノ希望ニ應ジ以テ教育ノ
助タランコトヲ期スルニ如カズト是レ本會ノ開設ヲ促ス
所以ナリ
明治三十八年一月　會主　鶴林　大沼善次郎
入會申込者ハ毎日授業時間中手續スベシ
會主住所牛込区牛込北町二番地
大沼　鶴林

32 「牛込漢文学会趣意」明治38年（1905） 写1冊

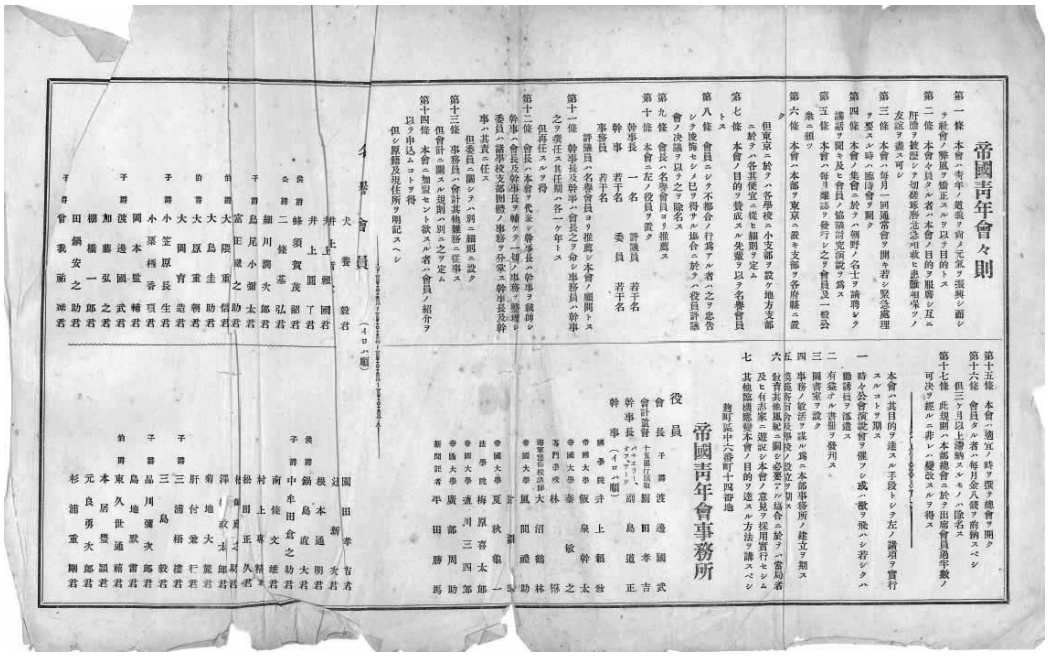
先に見た趣意についての文章に会則案を付し、冊子にまとめたもの。会則案については修正が施されており、たとえば、初案では、「篤学教授ナルヲ以て無月謝トス」、すなわち、無報酬となっていたのを、修正案では、月謝五十銭と改めているが、「但シ其人ノ事情ニヨリ報酬ノ如何ヲ問はず」と、事情によって月謝は納めてなくともよい旨が記されている。社会に貢献しようとする鶴林の志がうかがえる。


明治三十八年一月
牛込漢文學會趣意
會主　大沼　鶴林


牛込漢文學會々則
第一條　本會ノ聽講生ハ牛込居住者ニテ其志操確實品行方正ナルヲ要ス
但シ他ニ居住者ハ雖モ入會希望者ハ新可ス
第二條　篤學教授ナルヲ以テ無月謝トス
第三條　幹事　名ヲ置キ教場ノ管理
一助タランコトヲ期スルニ如カズト是レ本會開設ヲ促ス所以ナリ
明治三十八年一月　會主　鶴林大沼善次郎

33 「帝国青年会会則」明治32年（1899）頃か　写1枚

帝国青年会は、政治家の渡辺国武を会長として、明治32年（1899）5月頃に発足し、雑誌『帝国青年』を刊行するとともに、支部を設けその勢力を全国に拡大した。会則の第一条に「本会ハ青年ノ道義ヲ尚メ元気ヲ振起シ而シテ社会ノ弊風ヲ矯正スルヲ以テ目的トス」と記されているとおり、青年層の道徳心の育成を目的とした団体である。鶴林は、「海軍予備校講師　大沼鶴林」という肩書きで、「幹事」としてその名が掲載されている。



帝國青年會々則

第一條　本會ハ青年ノ道義ヲ尚メ元気ヲ振起シ而シテ社會ノ弊風ヲ矯正スルヲ以テ目的トス

第二條　本會々員タル者ハ本會ノ目的ヲ根蔕シ互ニ肝膽ヲ披瀝シテ切磋琢磨以テ忠誠ヲ盡スヲ可シ

第三條　本會ハ毎月一回通常會ヲ開キ若シ緊急處理ヲ要スル時ハ臨時會ヲ開ク

第四條　本會ノ集會ニ於テハ例野ノ名士ヲ聘シ講話ヲ及ヒ會員ノ協議討究演説ヲ爲ス

第五條　本會ハ毎月雑誌ヲ發行シ之ヲ會員及一般公衆ニ頒ツ

第六條　本會ハ本部ヲ東京ニ置キ支部ヲ各府縣ニ置ク

但東京ニ於テハ各學校ニ小支部ヲ設ケ地方支部ニ於テハ各其使宜ニ從ヒ細則ヲ定ム

第七條　本會ノ目的ヲ貫徹スル先驅ヲ以テ名譽會員トス

第八條　會員ニシテ本部ニ行爲アリ者ハ之ヲ忠告シテ改悔セシメ已ヲ得サル場合ニ於テハ役員評議會ノ決議ヲ以テ之ヲ除名ス

第九條　會長ハ名譽會員ヨリ推薦ス

第十條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

幹事長　一名　評議員　若干名

幹事　若干名　委員　若干名

事務員　若干名

評議員ハ名譽會員ヨリ推薦シ本會ノ顧問トス

第十一條　幹事長及幹事ハ會員ヨリ推薦シ本會ノ顧問トス

第十二條　幹事長及幹事ハ會員之ヲ命シ事務員ハ幹事之ヲ選任スルヲ得

但再任スルヲ得

第十三條　會長ハ本會ヲ代表シ幹事長ハ幹事ヲ統轄シ幹事ハ會長及幹事長ヲ輔ケテ一切ノ事務ヲ整理シ委員ハ議事及支部間機ノ事務ヲ分掌ス幹事長及幹事ハ其責ニ任ス

但委員ニ關シテハ別ニ細則ヲ設ク

第十三條　事務員ハ會計其他雑務ニ從事ス

但會計ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第十四條　本會ニ加盟スル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込ムコトヲ得

但シ原籍及現住所ヲ明記スヘシ

第十五條　本會ハ適宜ノ時ヲ撰テ總會ヲ開ク

第十六條　會員タル者ハ毎月金八錢ヲ納スヘシ

第十七條　但三ヶ月以上滯納スルモノハ除名ス

但シ之ヲ撤ル非レハ變改スルヲ得ス

本會ハ其目的ヲ達スル手段トシテ左ノ講習ヲ實行スルコトヲ期ス

一　時々公會演説會ヲ催フシ或ハ徹ヲ換ハシ若シクハ勸誘員ヲ派遣

二　有益ナル書籍ヲ發刊ス

三　圖書室ヲ設ク

四　事務ノ敏活ヲ謀ル爲ニ本部事務所ヲ建立ヲ期ス

五　英語新聞合校授ノ別ヲ設ケ必要アル場合ニ於テハ當局者教育其他風紀ニ關シ必要アル場合ニ於テハ當局者及ヒ有志家ニ遊説シ本會ノ意見ヲ採用實行セシム

六　其他臨機變本會ノ目的ヲ達スル方法ヲ講スヘシ

七

麹町區中六番町十四番地

帝國青年會事務所

役員

會長　子爵　渡邊國武

會計管理　十五區行政區　飯田孝吉

幹事長　子爵　島道正

幹事（イロハ順）

國學院　汁上頼致

帝國大學　飯泉幹太

帝國大學　秦欽之

專門學校　林悠

帝國醫學校教授　大沼鶴林

帝國大學　風間禮助

帝國大學　宮崎鎮一

法學院　梅原喜太郎

帝國大學　遠川三四郎

帝國大學　廣部周助

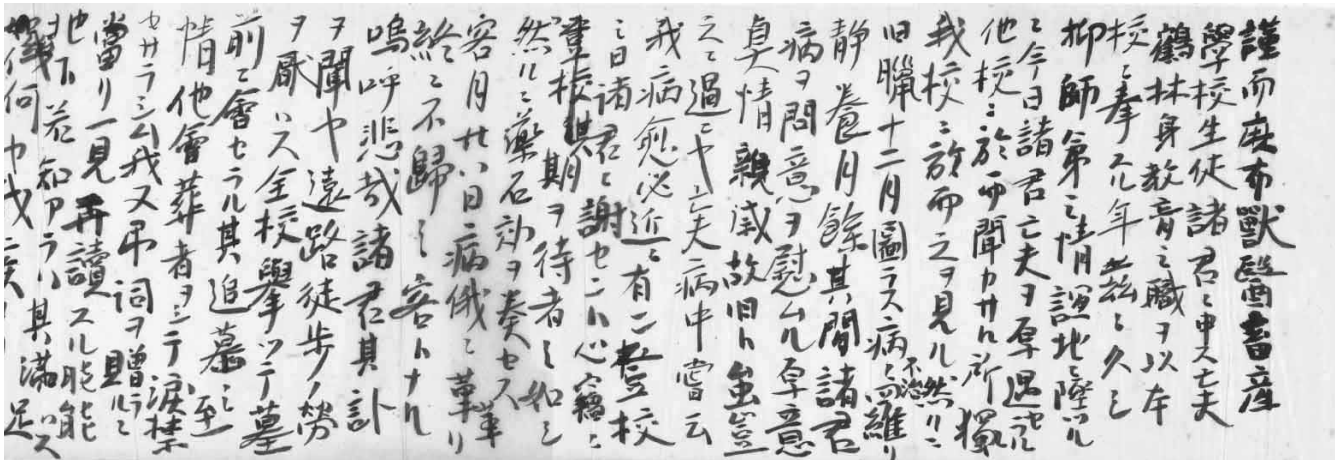
新聞記者　平田勝馬

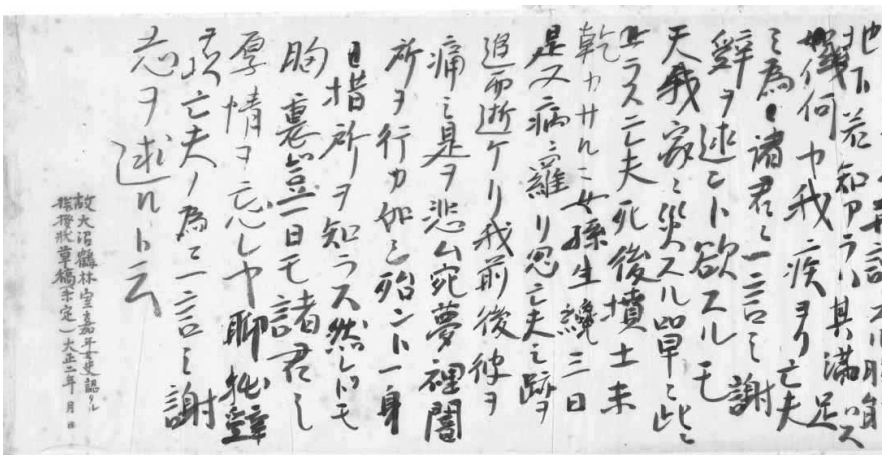
名譽會員（イロハ順）

侯爵　井上馨　伯爵　大山巌　伯爵　大隈重信　伯爵　大島圭介　伯爵　大鳥圭介　伯爵　大岡育造　伯爵　大原重朝　子爵　小笠原長生　子爵　小笠原長幹　子爵　小笠原長頂　子爵　小笠原長春

35 麻布獣医畜産学校宛大沼嘉年挨拶状 大正2年（1913） 写1枚

鶴林が晩年教鞭を執った麻布獣医畜産学校の教員・学生に対して、嘉年が送った挨拶状。鶴林は、大正元年（1912）12月より体調を崩し、翌年、帰らぬ人となった。嘉年の文章によれば、同校の学生たちは、谷中の瑞輪寺の鶴林の墓まで、麻布から学生たちが徒歩で集い、詣でたと言う。このことに対して、嘉年は、「諸君其訃ヲ聞ヤ、遠路徒歩ノ労ヲ厭ハズ、全校挙ツテ墓前ニ会セラル、其追慕之至情、他会葬者ヲシテ涙禁ゼザラシム」と述べ、謝意を表している。





【翻刻】

謹而麻布獣医畜産学校生徒諸君ニ申ス。亡夫鶴林、身教育ノ職ヲ以テ本校ニ奉ズル、年茲ニ久シ。抑師弟之情誼、地ニ堕ツルニ、今日諸君、亡夫ヲ厚遇セラル、他校ニ於而聞カザル所、独我校ニ於而之ヲ見ル。然ルニ旧臘十二月、図ラズ病（不治）ニ羅リ、静養月餘、其間諸君病ヲ問、意ヲ慰ムル、厚意真情、親戚故旧ト雖、豈之ニ過ンヤ。亡夫病中嘗云、「我病愈必近ニ有ン、登校之日諸君ニ謝セン」ト。心竊ニ其期ヲ待者之如シ。然ルニ薬石効ヲ奏セズ、客月廿八日病俄ニ革リ、終ニ不帰之客トナル。嗚呼悲哉。諸君、其訃ヲ聞ヤ、遠路徒歩ノ労ヲ厭ハズ、全校挙ツテ墓前ニ会セラル。其追慕之至情、他会葬者ヲシテ涙禁ゼザラシム。我又弔詞ヲ贈ラルニ当リ、一見再読スル能ハズ。地下若知アラバ、其満足如何ヤ。我疾ヨリ亡夫之為、諸君ニ言之謝辞ヲ述ント欲スルモ、天我家ニ災スル単ニ此ニ止ラズ。亡夫死後墳土未乾カザルニ、女孫生纔三日是又病ニ羅リ、忽亡夫之跡ヲ追而逝ケリ。我前後彼ヲ痛ミ是ヲ悲ム。宛（あたかも）夢裡闇所ヲ行ガ如シ。殆ンド一身措所ヲ知ラズ。然レドモ胸裏豈一日モ諸君之厚情ヲ忘レヤ。聊拙辞ヲ以亡夫ノ為ニ言之謝志ヲ述ルト云。

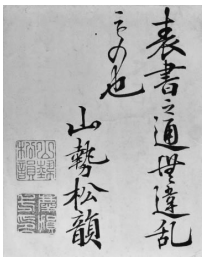
故大沼鶴林室嘉年女史認タル
挨拶状草稿（未定）大正二年　月　日

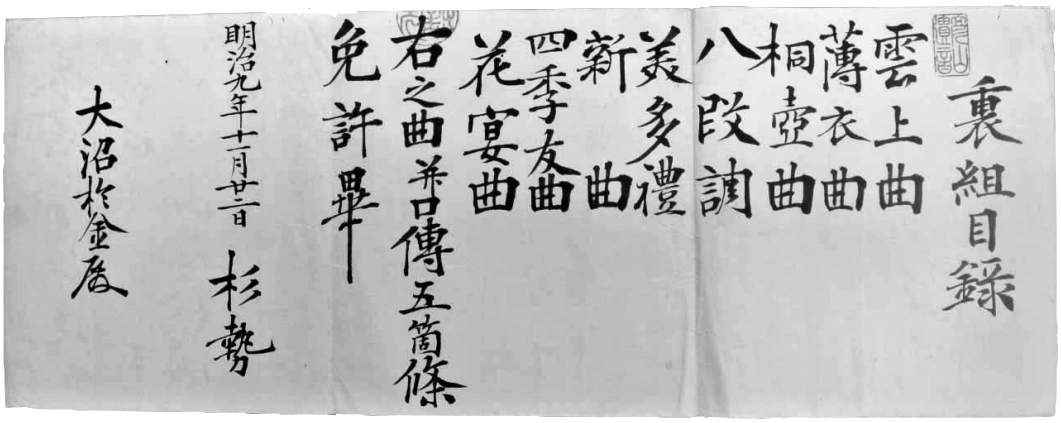
※翻刻者注　末尾二行の朱筆の書き入れは、楠荘三郎によるもの。

36 裏組目録（箏曲免状、大沼嘉年宛）明治9年（1876）　写1枚

明治九年（1876）11月22日に、大沼嘉年に対して与えられた裏組目録（箏曲、すなわち琴の免状の一つ）。嘉年が山田流の箏曲を学んでいたことが分かる。大沼千早氏は、本資料に関して、免状に記される「杉勢」が、下谷生まれの女流箏曲家初世町田杉豊であり、免状を発行している家元が、三世山瀬松韻（二つ折の免状のもう一面にその名が書かれている）であること、嘉年は目がやや不自由で、そのため母の梅は娘に琴を習わせたが、結局、嘉年は漢詩文の道に進むこととなったことなどを説明されている（「枕山先生のこと」『漢詩人たちの手紙―大沼枕山と嵩古香』218頁）。

紙を折った裏側↓



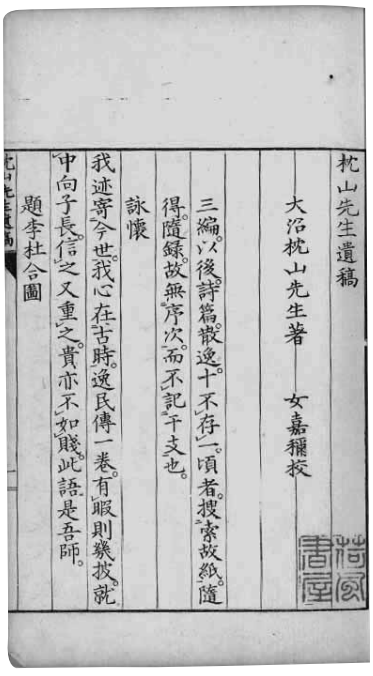


37 水上珍亮編『日本閨媛吟藻』
明治13年（1880）刊　中本1冊

本書は、江戸時代から明治時代にかけての日本の女性漢詩人54名の詩を収録した詞華集であり、大沼嘉年の詩は、「王昭君」「柳」の二首が掲載されている。

38 大沼枕山著『枕山先生遺稿』
明治26年（1893）刊　半紙本　1冊

枕山の没後、嘉年の編輯校閲によって編まれたもの。巻頭に記されているとおり、『枕山詩鈔三編』以降の詩稿が散逸してしまい、十分整理ができない中での編集となった。本書には、字句に乱れがあることが指摘されているが（鷲原知良「明治期の大沼枕山について―『明治名家詩選』を中心に」（『国文学 - 解釈と鑑賞』73巻10号、2008年10月）、それも同様の理由によると考えられる。なお、永井荷風の蔵書印「荷風書屋」（朱文方印）が押されており、本資料の伝来についてなお検討が必要である。



39 大沼嘉年詩文稿　写2枚

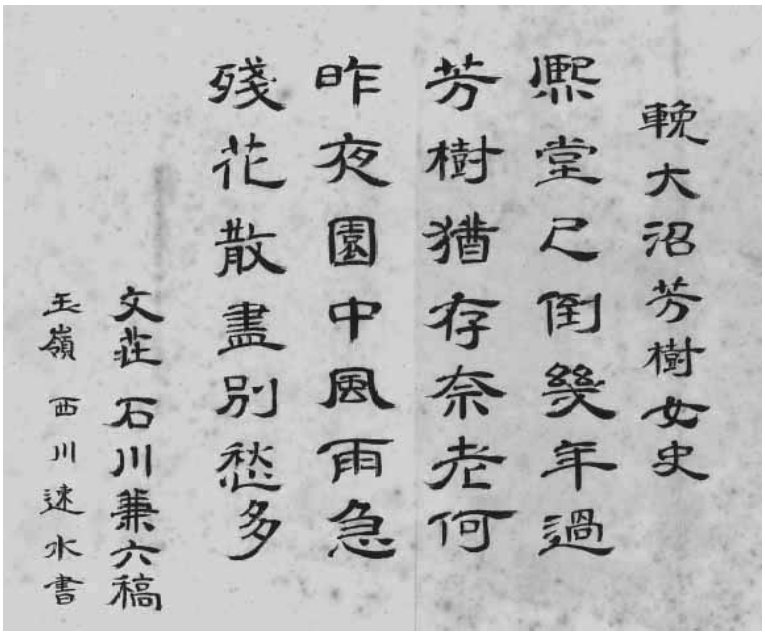
嘉年の詩文稿。「奉賀黙雷和尚還暦」という詩が記された詩稿には、楠荘三郎により、朱筆で「枕山先生代筆」との注記がなされている。また、「唐太宗論」が記された文稿の方には、荘三郎は「大沼芳樹女史筆也」と記している。

奉賀
奉賀黙雷和尚還暦
物外安禪味道腴
津梁濟世滿寰區
春風吹裏躋華甲
壽當知德不孤
大沼嘉年

唐太宗論
芳樹作

40 石川文荘詩稿「輓大沼芳樹女史」　写1枚

石川文荘（慶応3年〈1867〉）は、明治・大正・昭和にわたって活躍した漢学者である。詩を枕山に師事した。目が不自由であり、『本朝瞽人伝』（明治25年〈1892〉刊）において、塙保己一をはじめ、視力に問題を抱えながら、偉業を成し遂げた人物の伝記を著した。また、恵まれない子どもの教育に従事し、さらには掃苔会を組織し、自ら会長になるなどした。関東大震災まで下谷に住み、同地の詩人として、枕山の跡を継ぐ存在であったと言える。たとえば、下谷の金杉町界隈の景観や習俗について七絶詠った『金杉古意』(猶愛書屋、大正14年〈1925〉）には、一首ごとに枕山が評を付している。鶴林、嘉年の一家とは、長く交際があり、本資料以外にも「悼先師枕山先生」などの詩稿が残っている。


輓大沼芳樹女史
熙堂已倒幾年過
芳樹猶存奈老何
昨夜園中風雨急
殘花散盡別愁多
文荘　石川兼六稿
玉嶺　西川速水書

【翻刻】輓大沼芳樹女史／熙堂已倒幾年過、芳樹猶存奈老何。昨夜園中風雨急、殘花散尽別愁多。
文荘　石川兼六稿／玉嶺　西川速水書

【訓読】大沼芳樹女史を輓す／熙堂　已に倒れて幾年か過ぐ、芳樹　猶ほ存するも　老いを奈何せん。昨夜　園中　風雨　急なり、残花　散じ尽くして　別愁　多し。
文荘　石川兼六稿／玉嶺　西川速水書

Ⅲ　楠荘三郎と枕山をめぐる考証

41　楠荘三郎書入れ「下谷のはなし」抜刷合綴　大正13年（1924）頃か　1冊

本資料は、雑誌『女性』に掲載された、永井荷風「耳無草・下谷のはなし」（全6回の連載、5巻2号~6巻1号、大正13年〈1924〉2月~同年7月）及び「寺めぐり」（6巻1号、大正13〈1924〉7月掲載、後に改稿の上、「礫川倘佯記」と改題し、『荷風文藁』に収録）を抜粋・合綴したもの。とくに「下谷のはなし」については、その記述に対するコメントが、30箇所程度、欄外や本文中に記されている。

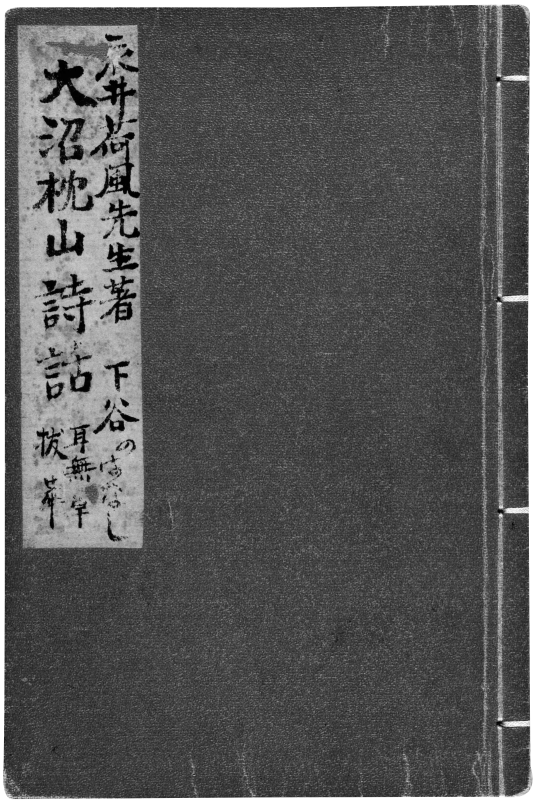
大沼千早氏のご教示によれば、この資料は、楠荘三郎の手により作成されたものであり、書入れも、楠荘三郎の筆であると言う。なお、見返しには「大沼正名（筆者注　荘三郎の子）所蔵」と記されているが、これも、荘三郎の配慮によるものと言う。

書入れの一つを紹介しよう。たとえば、「下谷のはなし」（其二）中の枕山の父竹渓の出自を説明した部分、すなわち、「季を次郎右衛門、諱を基祐、号を杉井といふ。後に長兄大沼竹渓の家を継いだ。即兄の準養子になつたわけで、これには何か事情があつたに相違ない。何故といふに竹渓には枕山といふ実子があつた。其の声名は寧ろ父よりも高かつた。然るに枕山は分家して乃父の家を相続しなかつたからである。」と記される箇所に対して、荘三郎は次のようにコメントを付している。「竹渓亡シ叔父杉井ハ枕山ノ後見トナル。枕山十五才ニナラバ家ヲ相続セシメムト言ト雖モ、杉井夫妻ノ逆待ニ堪ヘズシテ、家ヲ出テ、尾州医師加藤元（？）昌ニ寄宿セリト」（「？」は原文のまま）。すなわち、荷風が、叔父杉井が一旦大沼家を継いだことについて、荷風が何らかの理由があったのだろうと推測とともに記しているのに対して、荘三郎は、元々これは、十五歳になるまで期限付きの相続であったと主張しているのである。

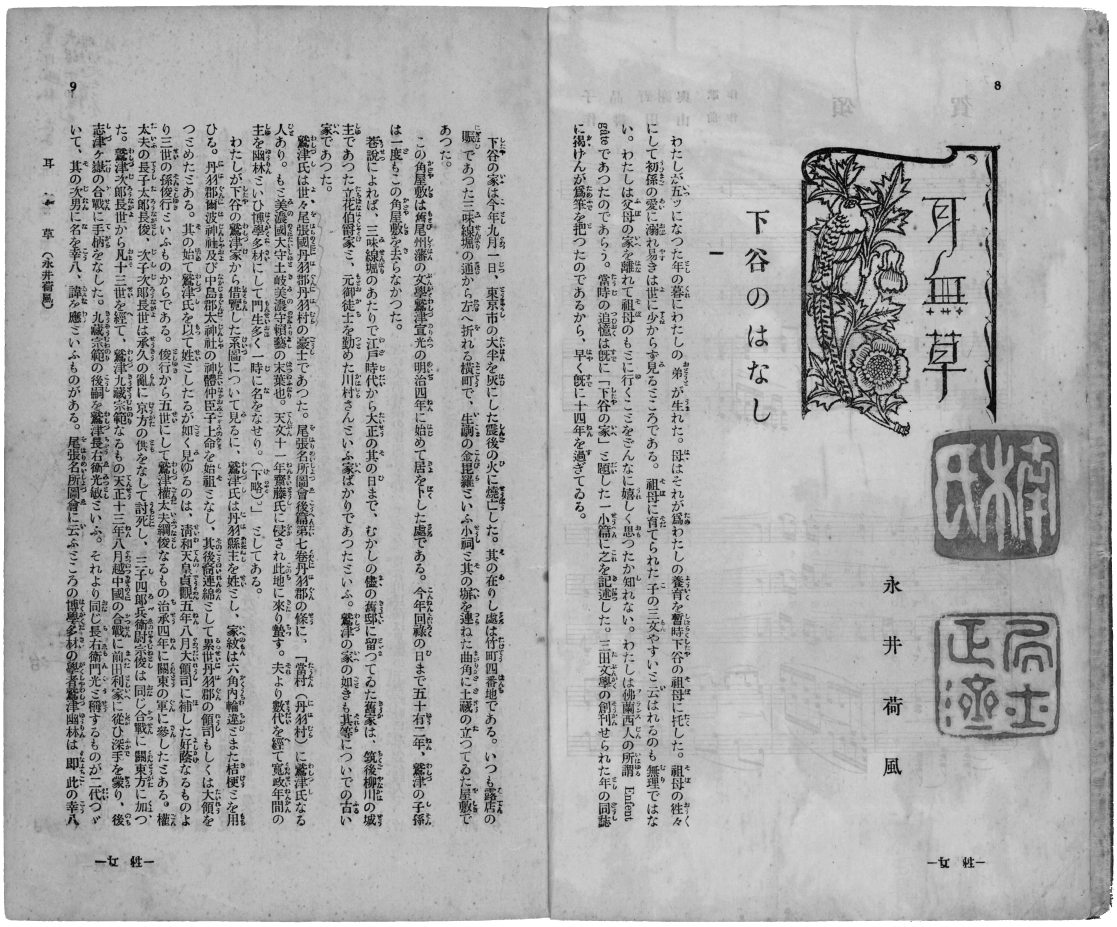
枕山が叔父と不和であったことについては、荷風も、嘉年から聞いて知っており、「下谷のはなし」においても、「かね子刀自の談話に、枕山は叔父治郎左衛門とは折合がよくなかつたので、金子一両あまりを旅費にして、道中屡飢に苦しみつゝ尾張に行つたと云ふ。然し其の年月を詳にしない。」（其五）と説明している。ただ、荘三郎の書入れは、加藤氏のもとへ赴いたなど、より詳細な情報を含んでいる。このように、荘三郎の書き込みは、「下谷のはなし」に対する枕山の遺族の反応を知り得るという点で、また、枕山の伝記に新たな示唆を与えるという点で、貴重と言えよう。

なお、荷風と楠荘三郎とは、面識もあり、連絡も折に触れ取り合っていた。「下谷のはなし」執筆の際に、嘉年との面談や資料貸出しのために、荷風に対応したのは、荘三郎である（大正12年〈1923〉8月18日及び同年10月15日楠荘三郎宛荷風書簡）。両者は、その後も、昭和期に至るまで文通しており、嘉年が没した際には、荘三郎から荷風へ通知がなされている（『断腸亭日乗』昭和9年〈1934〉3月27日の条）。

ただ、この「下谷のはなし」への書入れについては、必ずしも荷風の作品へは反映されていないようである。荷風は「下谷のはなし」を修正増補し、『下谷叢話』及び『改訂下谷叢話』を刊行しているが、先に見た叔父夫婦と枕山に関する書入れの情報は追加されていない。



表紙には、題簽が付され、「永井荷風先生著　下谷のはなし／大沼枕山詩話　耳無草抜萃」と墨書されている。



耳無草

永井荷風

下谷のはなし

一

わたしが五ツになつた年の暮にわたしの弟が生れた。母はそれが爲わたしの養育を暫時下谷の祖母に托した。祖母の性々にして初孫の愛に溺れ易きは世に少からず見るところである。祖母に育てられた子の三文やすいこと云はれるのも無理ではない。わたしは父母の家を離れて祖母のもとに行くことをさんなに嬉しく思つたか知れない。わたしは佛蘭西人の所謂 Enfant gâté であつたのであらう。當時の追憶は既に「下谷の家」と題した一小篇に之を記述した。三田文學の創刊せられた年の同誌に渇ゆんが爲筆を把つたのであるから、早く既に十四年を過ぎてゐる。

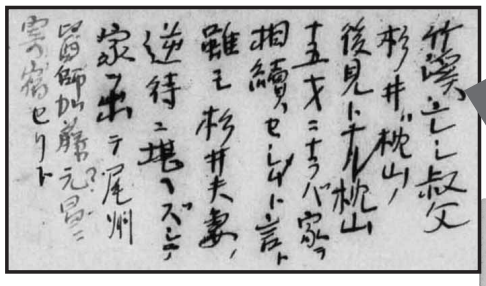
下谷の家は今年九月一日、東京市の大半を灰にした震後の火に焼亡した。其の在りし處は竹町四番地である。いつも露店の賑ひであつた三味線堀の通から左へ折れる横町で、生駒の金毘羅さいふ小祠と其の塚を連ねた曲角に土蔵の立つてゐた屋敷であつた。

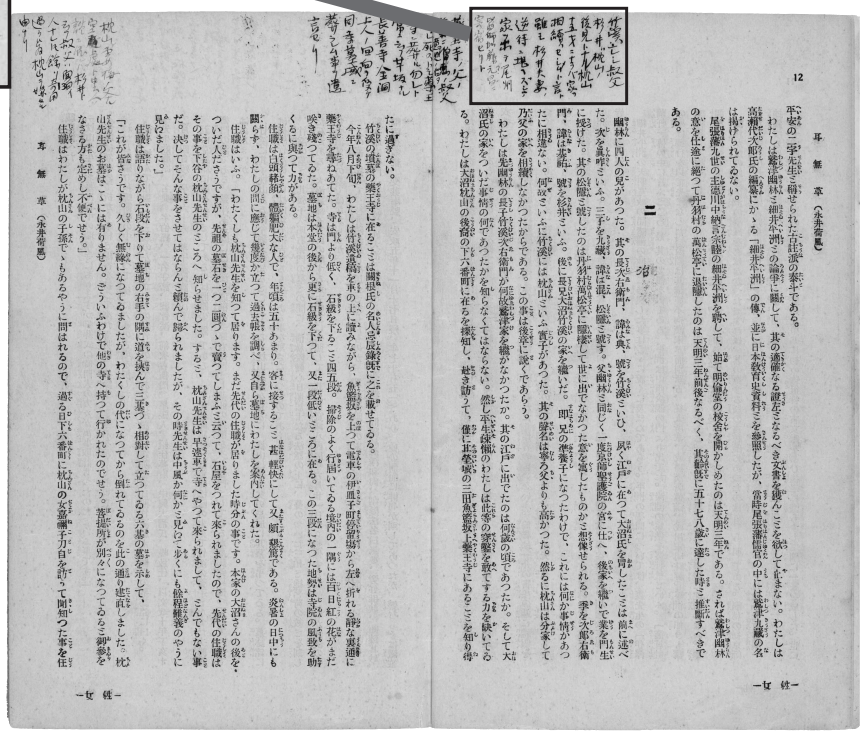
この角屋敷は薩摩州藩の家臣鷲津宣光の明治四年に始めて居を卜した處である。今年回祿の日まで五十有三年、鷲津の子孫は一度もこの角屋敷を去らなかつた。

巷説によれば、三味線堀のあたりで江戸時代から天正の其の日まで、むかしの儘の茅屋に留つてゐた舊家は、筑後柳川の城主であつた立花伯爵家と、元御徒士を勤めた川村さんといふ家ばかりであつたといふ。鷲津の家の如きも其等についての古い家であつた。

鷲津氏は世々尾張國丹羽郡丹羽村の豪士であつた。尾張名所圖會後篇第七卷丹羽郡の條に、「當村（丹羽村）に鷲津氏なる人あり。もと美濃國大守土岐遠江守頼益の末裔也。天文十一年齋藤氏に侵され此地に來り棲す。夫より數代を經て寛政年間の主を岡林といひ博學多材にして門生多く一時に名をなせり。（下略）」としてある。

わたしが下谷の鷲津家から借覽した系圖について見るに、鷲津氏は丹羽郡主を姓とし、家紋は六角内輪違さまた桔梗さを用ひる。丹羽郡廟波神社及び中島郡大神社の祠官世子孫命を始祖とさなし、其後爲連綿として累世丹羽郡の領司もしくは大領をつとめたある。其の始て鷲津氏を以て姓としたるが如く見ゆるのは、清和天皇貞觀五年八月大領司に補した行孫なるものより三世の孫後行といふものから である。後行から五世にして鷲津權大夫綱俊なるもの治承四年に陽東の軍に參したある。權太夫の長子太郎長俊、次子次郎長世は承久の亂に京方の供をなして討死し、三子四郎兵衛尉長俊は同じく合戰に陽東方に加つた。鷲津次郎長世から凡十三世を經て、鷲津九藏宗範なるもの天正十三年八月越中國の合戰に前田利家に從ひ深手を蒙り、後志津を織の合戰に手柄をなした。九藏宗範の後嗣を鷲津長右衛門光敏といふ。それより同じく長右衛門光之に傳するものが二代つゞいて、其の次男に名を幸八、諱を應といふものがある。尾張名所圖會に云ふところの鷲巣多材の裏者鷲津岡林は、即ち此の幸八



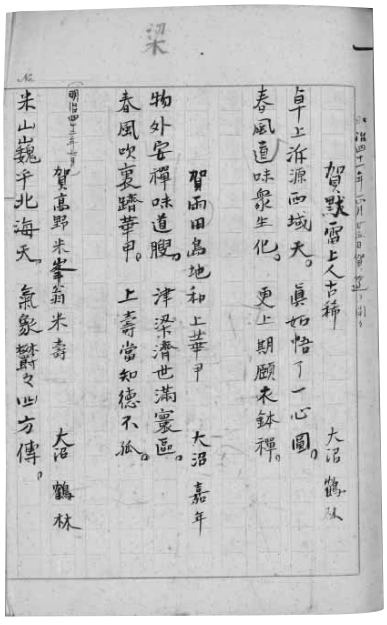


42　楠荘三郎編 大沼家伝来書籍目録　昭和14、15年（1939、40）頃　写1冊、罫紙3枚

楠荘三郎によってまとめられた大沼家伝来の書籍の目録。昭和14、15年（1939、40）頃に作られたものではないかと考えられる。50点あまりの書籍が記載されるが、なかでも、「論語二冊、孟子四冊、大学二冊　大沼枕山鶴林相伝所蔵」「後藤点四書（大学二冊　孟子三冊　論語四冊）大沼枕山朱書入　二代鶴林相伝　大沼正名秘蔵」など、枕山から伝えられた経書について記録されている点は注目される。

43　楠荘三郎編『上梓逸詩稿』大正・昭和期　写1冊

楠荘三郎が編んだ鶴林、嘉年の漢詩・和歌集。荘三郎自身に送られた詩など、刊行あるいは公表されなかった詩を中心に集めている。

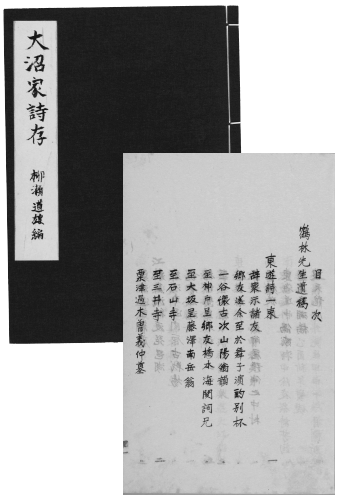


44 柳瀬道雄編『大沼家詩存』昭和期　写1冊

本資料は、柳瀬道雄氏によって編纂された大沼枕山、鶴林の詩文集及び印譜であり、大沼千早氏のもとに提出されたものである。柳瀬道雄氏は、福岡県久留米在住の文学研究者であるが、父の柳瀬劲介氏の代から、家族ぐるみで、鶴林や荘三郎の家族と昵懇にしていたと考えられる。この詞華集の編纂もそのような縁によるものであろう。枕山先生小照、目次、鶴林先生遺稿、芳樹夫人遺稿、枕山先生詩文拾遺、詞客輓歌、鶴林先生年表、枕山先生年表、東京詞三十首、印譜（鶴林、枕山）によって構成されている。

本資料の最も重要な達成は、詩集が編まれていない大沼鶴林についての詩を網羅的に収録している点であろう。ほぼ制作年の順に、約360首が収録されており、大沼枕山、長梅外、小菅揆一、市川湫村らの評もあわせて記録されている。なお、若年期の詩については、「東遊詩一束」（明治16年頃）、「江都雑詠」、「東海道中雑詠」、「病中諸作」（明治17、18年頃）、「南華雑詠」、「江都雑詠」、「南華雑詠」、「南岳評点詩一束」（明治18年頃か）など、いくつかのまとまりに分かれており、おそらく鶴林の詩稿などに基づいて編纂されたのであろう。

鶴林と枕山の印譜も貴重なものである。収録された印について具体的に述べると、まず鶴林のものとして、「大沼氏」（白文方印）、「大沼善印」（白文方印）、「大沼鶴林」（白文方印）、「鶴林」（朱文方印）、「鶴林」（朱文方印）、「字曰文淑」（朱文方印）、「山高水長」（白文長方印、関防印）、「大沼善」（白文方印）、「西川善」（白文方印）、「坐忘」（白文長方印、関防印）、「鶴林」（朱文小方印）の印影が掲げられている。また、枕山のものとして、「沼厚子寿」（白文方印）、「大沼厚字子寿」（白文方印）、「枕山」（白文方印）、「沼厚」（白文小方印）、「人性善」（朱文方印）の印影が収録されている。特徴的な篆書で彫られた「人性善」の印について、柳瀬は、一見、善次郎の名を持つ鶴林の印にも見えるが、楠荘三郎から、枕山の印である旨を教えられたので、枕山のものとして収録した（「此ノ印、正済様ノ御話ニヨレバ、枕山先生ノモノニシテ、鶴林先生ノ名ノ善トハ関係ナキ由ニ付、此処ニ竝ベマシタ」）と注記している。



各印影には、薄様の紙が貼られ、印影の写しやメモが記されている。
左右の写真は同一の頁。左側が薄様の紙をめくったもの。

解説

枕山の志を継ぐ者たち ―大沼鶴林・嘉年と楠荘三郎

合山林太郎

大沼枕山の生涯と文事については、すでに多くの研究がある。ここでは、その娘嘉年（かね）と女婿鶴林（かくりん）、また、その跡を継いだ楠荘三郎（くすのきしょうさぶろう）について、今回の企画展中の史料の読解などから明らかになったことを中心に述べてゆく。なお、大沼家の歴史については、大沼千早氏からの詳細なご教示があり、史料の所在についても様々なご示唆をいただいた。記して御礼申し上げる。また、本図録所収の資料に言及する際には、墨付き括弧で番号を記した。

1　大沼鶴林の青年時代

後に大沼鶴林となる西川善次郎は、文久三年（一八六三）に明石藩士西川文吉の二男として生まれた。鶴林自身の履歴書【一四】に従うならば[1]、明治五年（一八七二）、十歳の頃から、明治一一年（一八七八）まで明石で就学し、明治一二年（一八七九）から同一四年（一八八一）まで大坂に出て、藤沢南岳の門に入った。すなわち、泊園書院の学徒となったのである。その後、兵庫県小野中学校漢学教員として勤務し、明治一六年（一八八三）頃までには、上京していたと思われる。

この頃の鶴林と強い関係を持つのが、『蛍雪学庭志叢』という漢詩文雑誌である。この雑誌は、有終社という結社から発刊されており、鶴林は、創刊の号外から文章を投稿している。また、三〇号の頃まで、播磨明石の支局を担当し、同誌巻末には、多く「播磨明石当津村　沢田善次郎」などと記されている[2]。なお、鶴林は、若年期にしばしば沢田姓を名乗っているが、その経緯は明らかではない。

上京後、ほどなく枕山のもとに寄宿し、詩を学んだと見られる。また、咸宜園出身の儒者である長梅外からも多くを教わったと考えられる。たとえば、明治一六年（一八八三）に森槐南が増補刊行し、漢詩壇で話題となっていた翁方綱の『古詩平仄論』について、鶴林は、梅外と議論し、学ぶ必要のないものということで意見が一致したと述べている[3]。

青年期の鶴林の活動の中で最も重要であるのは、『進徳雑誌』【一七】の刊行である。この雑誌は、漢詩文雑誌であり、主として、名家の作品と、アマチュアの青年詩人による投稿により構成されている。その発刊の経緯については、鶴林自身が、後に著わされた『増補　漢学知要』（『漢学知要』第三版、明治三四年〈一九〇一〉刊）【二四】の前文において詳しく述べている。鶴林は、明治一〇年代半ば、『絵入朝野新聞』に、漢学廃止を主張する議論が掲載されたのを見て、「東台山下黄鶴仙史」の名で反論し、数度にわたって論戦を繰り広げることとなったと述べている。そして、この出来事を契機に、漢文学の状況に強い危機感を持つようになり、以文会友社という組織を作り、『進徳雑誌』の編集を企図することとなったと回想している。以下に掲げるのは、この『増補　漢学知要』中の文章の一部である。

> 今ヲ距ルコト十七八年前、余未ダ少壮英気勃々タルノ時、故長允文〔筆者注　梅外のこと〕三洲父子・中村正直諸老先生ト曾テ胸襟ヲ開キテ、世間ノ迂儒腐儒ガ孔孟聖賢之微意ヲ存セル所ヲ知ラズ、其固陋迂僻ナル所以ヲ痛論シテ、後生可畏ノ励言ヲ得タリキ。当時是等ノ村学究者流ニ警醒ヲ与ヘ、且之ガ改善進歩ヲ希図シテ進徳雑誌ナルモノヲ発行シ、以テ大ニ斯道ノ為ニ尽瘁スル所ノモノ、少小ナラザリシ也。

鶴林は、長梅外やその息子の三洲、中村敬宇らと議論し、当時の儒者たちの固陋であることを批判し、警鐘を鳴らすために、『進徳雑誌』編集を計画したと言う。鶴林が単に漢学の重要性を訴えようとしただけではなく、新しい時代に合ったかたちで、漢学の意義を考えようとしていたことが分かる。

『進徳雑誌』は一年あまり、号数にして二〇号ほど続いた。その後、すなわち、明治二〇年頃、鶴林は一旦大阪に戻り、一時は進徳学館という塾を経営していたようである。また、藤沢南岳、左氏珠山、土屋鳳州、近藤南州といった大阪在住の儒者たちとともに、振鐸会という団体を結成し、漢学振興のために活動したと言う。その後、明治二三年十月に、東京に戻り、嘉年と結婚し、大沼家の養子となっている。

鶴林とひさ（明治23年〈1890〉7月）

2　嘉年と鶴林

枕山の娘嘉年については、元々、目がやや不自由であったため、嘉年の母が彼女に琴を習わせようとしたこと、しかし、結局、漢学を修めることとなったことなどがすでに知られている[4]。実際に、明治一〇年代において、彼女は、漢詩壇にその名がある程度知られており、閨秀詩人の詞華集である『日本閨媛吟藻』（明治一三年〈一八八〇〉刊）【三七】や、新進の詩人の作を収録した『東京十才子詩』（同）に、彼女の詩が収録されている。

若年期の嘉年と鶴林との間の交流がうかがえるものに、『蛍雪学庭志叢』八一号（明治一八年五月）に掲載された鶴林の「墨水春景、次大沼芳樹女史韻」という詩がある。嘉年の詩の韻を用いて、隅田川の春景色を詠ったものであり、鶴林が枕山の塾に起居していた頃の作と推測される。

不負花之江戸名、香雲堆裏報春晴。江頭随処酒旗盛、欸乃声和歌舞声。

（花の江戸の名に負かず、香雲堆裏　春晴を報ず。江頭　随処　酒旗　盛んなり、欸乃（あいだい）の声は歌舞の声に和す。）

詩意は、雲のような桜の花霞の中、隅田川のほとりには、酒店が立ち並び、船歌に、岸辺で歌い舞う声が重なる、といったものとなるだろう。「花のお江戸」という言い回しが用いられるなど（起句）、表現にやや和習が認められるが、竹枝詞風の風情豊かな詩であり、鶴林の才気がうかがえる。

鶴林が、嘉年と結婚した翌年、明治二四年（一八九一）に、枕山は逝去した。この後、鶴林と嘉年とは、枕山の文学を後世に伝えるために力を尽くしている。まず、嘉年は枕山の遺稿を整理し、明治二六年（一八九三）に『枕山先生遺稿』【三八】を出版している。詩稿が散逸し、詩篇の順序が整っておらず[5]、また、十分な校閲がなされていないなどの問題はあるが、枕山の晩年の詩作を知る上での貴重な詩集である。

鶴林も、明治二九年（一八九六）に『枕山先生遺書　詩学明辨』【一九】を刊行している。この書は、実際には、中国・日本の儒者・文人の詩論から、鶴林が重要と思うものを抜萃して構成されており、必ずしも全てが枕山の説で占められているわけではない。それにもかかわらず、枕山の名を冠するのは、枕山との関係を強調したい、という鶴林の気持ちの表れであろう。

明治三〇年代初頭において、鶴林は、漢詩人としても、一定の評価を得ていた。詩人としての目立った業績として、『新声』や『新潮』において、漢詩欄の選者をつとめたことが挙げられる。『新声』、『新潮』は、新潮社の創始者である佐藤義亮が刊行した文芸雑誌であり、読者から投稿された詩歌や文章を多く掲載し、それが人気を集めていた。この中で、金子薫園の和歌欄、河東碧梧桐の俳句欄と並んで、漢詩欄を担当したのである。

もっとも、鶴林は、必ずしも漢詩欄の現状に満足していなかったようである。鶴林は、和歌や俳句と比較して、漢詩の不人気ぶりは明瞭であり、投稿されてくる作も少なく、その作も粗野なものが多いと嘆いている[6]。このようななか、鶴林は、しだいに教育者としての活動に軸足を移していったと考えられる。

3　教育者としての鶴林

以下、明治三〇年代を中心として、中年以降の鶴林の活動と、家族の足跡を見てゆくことにしよう。

まず、鶴林と嘉年の居所の変遷を辿ってゆこう。彼らは、枕山の没後、本郷周辺を転々としているが、やがて、神楽坂周辺に居を構えるようになった。具体的には、明治一〇年代後半には、牛込区箪笥町三十二番地（『枕山先生遺書　詩学明辨』奥付、明治二九年〈一八九六〉）に住んでいたことが分かる。その後、三〇年代半ばには、牛込区矢来町山里百四号（再刊『在邇録』奥付【一六】、明治三四年〈一九〇一〉）や同甲良町二十五番地（大沼義塾趣意書【二九】、明治三五年〈一九〇二〉）などの住所が確認できる。明治三〇年代後半以降は、牛込北町二番地へと転居している。

この間、鶴林は、そのほとんどの時期を、漢文教師として学校に勤務している。その様子を履歴書の記載などにしたがって見てゆくと、まず、明治二三、二四年（一八九〇、九一）には、千葉県の市川にある中山法華経寺の檀林の漢学教師となっている。明治二五年（一八九二）から三二年（一八九九）までは、海軍予備校の漢文教師

晩年の嘉年（昭和6年〈1931〉5月）

であった。海軍予備校は、海軍兵学校や海軍機関学校への入学を希望する学生の通う学校であり、元々は芝にあったが、後に麹町区元園町に移っている。明治三二年（一八九九）以降、神田区猿楽町にあった順天中学に勤務した。順天中学は、幕末・明治期の数学者である福田理軒が設立した順天求合社を母胎とした学校である。ここで、鶴林は、修身と漢文の両方を担当している。晩年には、麻布畜産獣医学校にも奉職した。

こうした勤務のかたわら、鶴林はいくつかの教育関係の書籍を編纂している。明治三〇年（一八九七）には、自らが注解を集めた『点註四書　論語読本』【一二五】を、明治三二年（一八九九）には、『漢文異采』や『続漢文異采』【一二六】といった漢文教科書を刊行している。これらの著述は、漢文教師としての彼の声価を高めたであろう。

また、鶴林は、勤務校とは別に、自身で漢学塾を経営してもいる。明治三三年（一九〇〇）の頃から、大沼義塾と呼ぶ学舎を開き、学生を寄宿させて教育にあたった。また、明治三八年（一九〇五）頃には、牛込漢文学会を開き、近隣の学徒に対して漢学の講義を行っている。

この時期、鶴林にとって、枕山は、若者を善く導く理想の教育者として映ったようである。先に述べた大沼義塾の趣意書の中には、次のように記されている（【三二】【三三】）。

且余自ラ量ラズ、性行ノ高潔、詩道ノ泰斗以テ天下ニ鳴リシ、先師大沼枕山先生ノ箕裘ヲ襲グヲ以テ、励精一番、益々学徳ヲ修養シ、善ク先師ノ遺志ヲ紹ギテ後進子弟ヲ薫陶スルヲ以テ己ノ任ト為シ、敢テ家声ヲ墜サザランコトヲ誓ヘリ。

ここからは、教育に奮励する自らの姿を、枕山の遺志の実現と考え、自身の活動の意義を見出そうとする姿勢が看取される。

4　鶴林の明治社会への眼差し

以上のように、鶴林の活動は多岐にわたっているが、彼はいかなる信条を持ち、明治の社会をどのように見ていたのであろうか。

鶴林の思考の一つの柱は、国家への信頼とその発展の希求である。たとえば、鶴林が若年期に草した「祝学庭志叢発兌」（『蛍雪学庭志叢』創刊の号外〈明治一四年〈一八八一〉一一月〉に投じた文章）には、「抑（ソモ）モ文学ノ興廃ハ天下ノ治乱ト世運ノ隆盛トニ依テ互ニ相引摂スル者ナリ。故ニ天下能ク治マリ世運隆盛ナレバ文学興ラザルハナシ」などと、文学の隆盛と国家の発展とを結び付ける説明がなされている。こうした考え方のもと、鶴林は、文学を興すためには教育が重要で、学校や詩文雑誌などの役割がきわめて大きいと主張しているのである。国家への意識は、実作においても表れており、たとえば、「国体短古」（『新声』四巻一号〈明治三一年一月〉）などの、日本の国力充実やその独自の国の成り立ちを賛美する詩が作られている。

同時に、鶴林は、人々の道徳心に対して常に関心を払っていた。とくに中年以降、鶴林は、青年層の精神が荒廃していると感じたようである。たとえば、先に見た大沼義塾設立趣意書においても、鶴林は、「今ヤ我国文運隆盛ニシテ教育既ニ普及セザルニ非ズ。学術亦進歩セザルニ非ズ。然ルニ何ゾヤ、反テ近来学生ノ風紀大ニ壊頽シ其品行ノ陋醜実ニ公言スルニ忍ビザルモノアツテ存ス」と述べ、明治の社会は、知識の発達と比較すると、道徳心の涵養が十分になされておらず、当時の青年たちの風紀が乱れていると説いている。そして、その是正のため、自身は塾を興すのだと主張している。

このような人間の道徳心に対する関心が、最も先鋭的に表出されたのが、「塩車行」という詩である。この詩は、「国体短古」と同じ『新声』四巻一号（前出）に掲載されているが、同じ作が、より詳細な題とともに、柳瀬道雄氏の編んだ『大沼家詩存』【四四】に収められている。この『大沼家詩存』中の記述によれば[7]、詩は、明治二四年（一八九一）一二月一九日に、研学会の片渕琢が、麹町の弁慶坂において荷車を押していた際の出来事について詠っている。片渕らが重たい荷車を押していたが、荷が重いので転覆しそうであった。多くの通行人が冷笑しながら通り過ぎるなか、一人の少女が駆け寄り、車を押すのを手伝ったという。

この話を片渕から聞いた鶴林はその情景を全三十二韻の古詩にまとめた。転倒しそうな荷車を少女が助ける場面は、次のように描かれる（一七～二四韻）。

積載薪与炭、推挽志愈堅。曾出麹街坂、凸凹車欲転。
傍観多少客、冷然無救旃。不図一学女、纖手太周旋。
君亦得気力、人車纔安全。喜極垂感涙、謝恩辞万千。
慇懃問名姓、悠然去翩翩。想是陰徳志、足称濁世蓮。
（薪と炭とを積載し、推挽するに　志は愈（いよい）よ堅（かた）し。曾（すなは）ち麹街の坂に出て、凸凹車　転ばんと欲す。傍観す　多少の客、冷然として旃（これ）を救ふこと無し。図らずも一学女、纖手もて太（はなは）だ周旋す。君　亦た気力を得て、人車　纔（わづ）かに安全たり。喜び極りて　感涙を垂る、恩を謝す　辞は万千。慇懃に名姓を問へば、悠然として去ること翩々たり。想ふに是れ陰徳の志、称するに足る　濁世の蓮と。）

ここで言う「君」は、片渕のこと。少女の助けによって、片渕が気力を取り戻したことや、片渕が感激とともに涙を流しながら礼を言う様が、印象的に描かれている。詩の末尾において、鶴林は、この少女はまだ幼いが、その勇気は、年長者にも劣らないと主張し、藤田東湖が文天祥の詩に倣って言うところの「正気」が、この少女を通して現れたのであろうと説いている。社会における人情の機微を詠じた作は、枕山にも多いが、この詩などはそれを巧みに発展させたものと言えよう。

5　楠荘三郎による枕山の顕彰

鶴林の娘ひさと結婚した楠荘三郎については、なお十分な史料の分析ができていない。その詳細な考察は、別の機会に譲り、ここでは、その概略のみを簡潔に記したい。

楠荘三郎は、明治一七年（一八八四）に秋田県由利郡親川村に生まれ、若き日に鶴林の塾で学んだと言う[8]。荘三郎は明治三八年（一九〇五）四月に大沼鶴林の長女ひさと結婚している。枕山の家を継ぐという意識は、荘三郎も強く持っていたが、自身の生家である楠家の後継者が早く亡くなったため、楠の姓を名乗ることとなった。

明治四〇年代の荘三郎は、仕事のため、平壌や京城と日本とを行き来する生活であったようである。その後、鉄道局に勤めるようになり、昭和八年（一九三三）九月二十六日に、書記から副参事へと昇進している。昭和一〇年（一九三五）八月十四日に辞職願を出し、同二十八日に職を解く旨、辞令が下りた[9]。

荘三郎は、嘉年らと一緒に一家を構え、初めは先に述べた牛込北町の住居に住んでいたが、後に麹町区下六番町一三番地に屋敷を構えた。そのような中、明治三九年（一九〇六）に生まれた息子の正名に大沼家を継がせたいと考え、その将来に期待をかけた。枕山関係の資料の中には、正名の所有を示す書入れがなされていることが多い【四一】。これらは、みな荘三郎の手によって行われたものであったと言う。しかし、正名は、大正一二年（一九二三）七月に、一八歳の若さで亡くなった。このことによって、荘三郎は非常に落胆したと伝えられている。なお、荷風が、「下谷のはなし」執筆のため、嘉年やひさ、荘三郎らが住む下六番町の家を訪れるのは、正名の没後約二か月半の後である。後に荘三郎は、荷風の「下谷のはなし」を抜粋し、コメントを付しているが【四一】、そのときの気持ちはどのようなものであっただろうか。

若き日の楠荘三郎
（明治37年〈1904〉10月、成城高等学校在学中）

鉄道局を退職した後、荘三郎は、気候の穏やかな静岡県の興津（興津中宿八五番地）に居を構えた。この風光明媚の地における、引退後の静かな生活の中で、彼は、大沼家に伝わる書籍を整理し、詩文稿や書籍については、筆跡などに注釈を付けていった【三五】【三九】。今日、研究が可能なかたちで、資料が保存されているのは、この荘三郎の考証作業の賜物なのである。

1　この履歴書は、他の資料と記述が食い違う部分もあるが（解題参照）、今は仮に従っておく。

2　ほかに『蛍雪学庭志叢』第三号（明治二五年一月）に、漢文「交信論」を沢田善次郎の名で投稿している。

3　『枕山先生遺書　詩学明辨』（六二頁）に「但清人ノ初メテ古平仄論アリシヨリ、本邦一二ノ人其顰ニ倣ヒ平仄一定ヲ論ズルコトアリタレドモ未ダ一ヲ知テ二ヲ知ラザル、徒ニシテ妄ニ従フ可ラズ。余嘗テ長梅外先生ト談偶マ平仄論ニ及デ一笑ニ付シタリキ」という記述がある。

4　『漢詩人たちの手紙―大沼枕山と嵩古香』（ゆまに書房、一九九四年、二二八頁）。

5　『枕山先生遺稿』の巻頭には、「三編以後、詩篇散逸、十不存一。頃者捜索故縁、随得随録。故無序次、而不記干支也（三編以後、詩篇は散逸し、十に一も存せず。頃者、故縁を捜索し、得るに随ひて随録す。故に序次無くして、干支を記さざるなり。）」と記されている。

6　『新声』四巻二号、明治三三年八月）の漢詩欄において、鶴林は、「頃漢詩欄寂寥不振之声、頻伝耳朶。選者固不得免其実也。然復有不得不為之辨者存焉。毎其所寄詩稿、比之他欄、則不過三分之二、蓋似有難易。然而除十数人之外、多是漫然下筆不敢費工夫。甚則不成詩稿、或平仄訛誤（下略）（頃ろ、漢詩欄の寂寥不振の声、頻りに耳朶に伝はる。選者は固より其の実を免るるを得ざるなり。然れども復た之が為に辨ぜざるを得ざるものの存する有り。毎に其の寄する所の詩稿、之を他欄に比すれば、則ち三分の一に過ぎず、蓋し難易有るに似たり。然れども十数人を除きての外、多くは是れ漫然と筆を下し、敢て工夫を費やざるものなり。甚しきは則ち詩稿を成さず、或ひは平仄訛誤す（下略））」と述べている。

7　『大沼家詩存』所収の詩の題は、以下のような説明で始まっている。「明治二十四年十二月十九日、自活研学会々主片渕琢君、躬自与会員北風辰雄君車載薪炭、而二人推挽将登麹街辨慶坂急。力不堪其重、気竭勢窮。誤一歩、則覆車傷人可知耳（明治二十四年十二月十九日、自活研学会の会主片渕琢君、躬自ら会員の北風辰雄君と薪炭を車載し、二人して推挽して将に麹街の弁慶坂の急なるを登らんとす。力、其の重きに堪ずして、気竭き勢窮まる。一歩を誤れば、則ち覆車して人を傷ふこと知るべきのみ。）」

8　荘三郎の事跡は、大沼家に伝わる複数の資料及び大沼千早氏のご教示に基づく。本節において注記のないものはすべて同様である。

9　国立公文書館、任免裁可書任免裁可書・昭和十年・任免巻六十六「鉄道局副参事楠荘三郎免官」（任B02000180100）による。

附記　本文中に掲載した写真はすべて大沼千早氏ご所蔵のものである。また、本論をなすにあたっては、大沼宜規氏の講演資料「来簡にみる大沼枕山とその継嗣鶴林―国立国会図書館所蔵「大沼枕山・鶴林関係資料」をもとに―」（二〇一九年二月二日、台東区生涯学習センター、企画展「幕末・明治の漢詩人大沼枕山」トーク・イベント）より多くの示唆を得た。記して深謝申し上げる。

〈参考資料〉

『永井荷風全集』第15巻（岩波書店、「下谷のはなし」『改訂　下谷叢話』を収録）
木下　彪『明治詩話』（文中堂、一九四三年、二〇一五年に岩波文庫に収録）
『漢詩人大沼枕山の世界―十九世紀後半の江戸詩壇』（福生市郷土資料室、一九八八年）
日野龍夫『江戸詩人選集　第十巻　成島柳北・大沼枕山』（岩波書店、一九九〇年）
『漢詩人たちの手紙―大沼枕山と嵩古香』（ゆまに書房、一九九四年）
『台東区の文化財保護』第2集（一九九八年三月、とくに「大沼枕山墓」の項）
『大沼枕山来簡集』（福生市郷土資料室、一九八八年）
内田賢治『大沼枕山逸事集成』（大平書屋、二〇一四年）
前田　愛『幕末・維新期の文学』（法政大学出版局、一九七二年、とくに「枕山と春濤―明治初年の漢詩壇」）
今関天彭『大沼枕山』（『書苑』四巻一号、一九三四年、後、『江戸詩人評伝集二』（平凡社、二〇一五年に所収）
塩崎文雄「『下谷叢話』考（二）―依拠資料の考察を中心に―」『広島女学院大論集』22号、一九七二年、連載有り）
安田吉人「明治期の大沼枕山」（『地方史研究』41巻6号、一九九一年）
安田吉人「漢詩人大沼枕山の生涯」（『調布日本文化』5号、一九九五年）
大沼千早「枕山先生のこと（続）のぼり旗」『游星』10巻1号（通巻16号）（一九九六年、連載有り）
鷲原知良「大沼枕山の剣南体」（『待兼山論叢』27号、一九九三年）
鷲原知良「大沼枕山の太平頌述―幕末文人の理想世界」（『江戸文学』18号、一九九七年）
斎田作楽「「東京詞」と『皇朝分類名家絶句』」（『太平詩文』6号、一九九七年）
福井辰彦「改作のあとさき―『下谷のはなし』から『下谷叢話』へ」（『京都大学国文学論叢』11号、二〇〇四年）
濱　久雄「大沼枕山の詩風とその詠史詩」（『東洋研究』165号、二〇〇七年）
内田賢治「大沼枕山自筆詩稿『枕山随筆』について」（『太平詩文』40号、二〇〇八年）
鷲原知良「明治期の大沼枕山について―『明治名家詩選』を中心に」（『国文学―解釈と鑑賞』73巻10号、二〇〇八年）
郭　　穎「『東瀛詩選』における兪樾の修改―大窪詩仏・大沼枕山の所収詩について」（『中国中世文学研究』53号、二〇〇八年）
内田賢治「大沼枕山自筆詩稿『己亥年枕山遺稿』について」（『太平詩文』49号、二〇一一年）
内田賢治「天保十年の大沼枕山」（『太平詩文』50号、二〇一一年）
内田賢治「『枕山詩鈔』の版木及び本文校訂」（『太平詩文』62号、二〇一四年）
合山林太郎『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』（和泉書院、二〇一四年）
徳田　武「大沼枕山伝補遺―『下谷叢話』補遺」（『明治大学教養論集』499号、二〇一四年）
詹　満江「大沼枕山江戸時代末期の詠史詩について」（『杏林大学外国語学部紀要』27号、二〇一五年）
池澤一郎「大沼枕山と蘇軾―大沼枕山の追次韻詩論―」（『明治大学教養論集』515号、二〇一六年）
池澤一郎「木下周南の選んだ大沼枕山の漢詩」（『斯文』131号、二〇一七年）
鷲野正明「大沼枕山『江戸名勝詩』の「視点」と「視線」―「天地人間素朴の心」」（『斯文』131号、二〇一七年）
「第52回貴重書等指定委員会報告　新たな貴重書のご紹介―「大沼枕山・鶴林関係資料」」（『国立国会図書館月報』675、676号、二〇一七年）
大村和人「大沼枕山の作品における陶淵明像と『歴代詠史百律』の性質」（『日本漢文学研究』14号、二〇一九年）

編集後記

◎大沼枕山は、江戸の漢詩人の中で、最も人気のある存在であると言えます。そのことは、これまで枕山関係で発表された論文の数の多さなどからも明らかです。ただ、枕山については、きわめて多くの資料が残っており、なお多くのことが分かる可能性があります。◎大沼鶴林と嘉年、楠荘三郎については、枕山研究、近代漢文学研究のいずれの点からも興味深い存在であるにもかかわらず、十分に研究が進んでいない状態です。◎今回、大沼千早氏によって寄託された資料は、断片的な詩文稿やメモなども多く、全体の調査完了については、なお時間を要します。今回の企画展示では、これらの資料群が、研究上いかに大きな価値を持つかを明らかにするという意図のもと、44点の書幅、書籍、詩文稿、書簡などに解説を付しました。◎調査は、資料を読解するとともに、二度、大沼千早氏にインタビューを行い、その来歴などについてご教示を賜りました。◎資料の解読や考察にあたっては、町泉寿郎、堀川貴司、福島理子、新稲法子、大沼宜規、出口智之、多田蔵人の諸先生のご教示を賜りました。また、二松学舎大学・東アジア学術総合研究所のスタッフの皆様には多くのご示唆をいただきました。心より御礼申し上げます。◎このほか、枕山と荷風の問題について、ともに考えてくれた慶應義塾大学文学部二〇一八年度国文学演習の参加者に深謝申し上げます。（合山林太郎）

企画展

大沼枕山・鶴林と永井荷風『下谷叢話』

発行日　二〇一九年九月二六日
編集者・発行者
二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「近代日本の「知」の形成と漢学」
本　部　〒一〇二―八三三六
東京都千代田区三番町六―一六
事務局　〒一〇二―〇〇七四
東京都千代田区九段南二―四―一四
印　刷
製　本　株式会社　サンセイ

2019 ©

（非売品）

二松学舎大学　〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16